

---

# 紅茶と数奇な図書館と

黒井鴎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅茶と数奇な図書館と

### 【Nコード】

N8913W

### 【作者名】

黒井鴉

### 【あらすじ】

荻原功太の働いている図書館は、まるで西洋の洋館のような形相をしていた。開閉するたびに大きな音をたてる鉄の門を潜ると、巨大な庭が見える。「曰く付き」ばかりを集めた図書館で、怪異に愛された功太は様々な伝奇的体験をすることとなる。甘い紅茶好きの食えない幼馴染や、ミステリアスな管理人と共に、今日も地下貯蔵庫の本の整理に励む。

\*ありがちな設定の中をありがちな主人公とありがちなヒロインが

ありがちに泳ぎ回ります。  
\* 一話完結の連続ものです。

## 「甘い紅茶と影喰いと」

荻原功太の働いている図書館は、まるで西洋の洋館のような形相をしていた。開閉するたびに大きな音をたてる鉄の門を潜ると、巨大な庭が見える。庭と言っても、手入れをする人間がいなかったために雑草も伸び放題で、空き地と言った方が近い。以前功太は草刈りに手を付けたが、あまりの膨大さに三日で諦めることとなった。

図書館は首都圏にある山の奥深くに立地している。もともと人がくることを想定した建物ではないので、妥当な場所と言える。道はある程度舗装されており、なんとか車一台を通すことが出来る。来るたびに車に傷を付けることになるので、関係者以外の来訪は肝試しが関の山だった。

功太の主な仕事は書庫の整理だ。この図書館には行き場の無い、いわゆる「いわくつき」が集められている。人形寺院に主人をなくした人形を保管するように、ここでは本を保管していた。

貯蔵されている本は普通の小説から、辞書や妖怪モノや中身が白紙のものまで様々だ。整理がてらそれらに目を通していた功太は、知識だけが無駄に蓄積されていた。今日もスローペースで書庫の整理を行おうと、地下への階段を降りる途中、呼び鈴が鳴った。

珍しい。今日は雇い主が来る日ではないので、本当の来客ということになる。功太は踵を返し、玄関へと向かった。

功太が扉を明けるまでも無く、来客は既に図書館に足を踏み入れていた。

「勝手に入るのは、どうかと思うよ」

侵入者が見知った顔であったため、功太はホツと胸をなでおろす。腰辺りまで伸びたすなりとした黒髪。吹けば飛びそうなほど細い手足。黒いロングコートが細身の身体によく似合っている。功太の幼馴染である新藤香<sup>シンドウカオリ</sup>だった。細すぎる手足に、功太は何度もダイエツ

トを控えるように言ったのだが、本人は満足していないようだ。彼女の両親が一人暮らしを認めないのも、そこに原因があるらしい。功太は香の両親とも仲が良く、相談も頻繁に持ち込まれたが、香自身がダイエツトを控える気が無い以上曖昧に合意することしかできなかった。

「携帯が繋がらない功太が悪い。直接くるのにどれだけ苦労したとか」

山奥だけあって、携帯電話は圏外になる。ごくまれに電波が入ることもあるが、信用できる頻度ではない。功太は図書館の固定電話の番号を覚えていたが、香は教えてもらったこと自体をすっかり忘れてしまっていた。

「番号、教えたはずなんだけど。相変わらずのエピソード記憶の弱さ……。それから電話が繋がらないのと、勝手に敷地に入り込むのは全く関係がない」

「功太、うるさいぞ」

ぴしゃりと小言を遮った。功太は聞こえるように溜息をつき、香を客間に案内した。

「なんでスーツなんだ？ ここには功太以外誰も居ないのだろう？ 部屋着で仕事すればいいと思うのだが」

ソファに座るなり、香が無表情に言った。功太はキッチンに向かい、ポットでお湯を沸かしている。彼女の好きな甘い紅茶を出して、穩便にお引き取り願おうと思ったのだ。

「一応これでも仕事だからな。給料もいいし、住み込みだから家賃も浮く。多少は真面目にやるさ」

「仕事に本は読むけれど。」「真面目」という言葉に自分自身で突っ込みを入れる。

「ふむ。まあいいさ。スーツも眼福。可能ならパジャマで出てきて欲しかったが」

「男女逆転してないか？ セリフがおっさんくさいぞ」

いつものように軽く香をいなす。癖のある彼女の性格も、さすがに二十一年経てば慣れたものだった。昔は自己中心的だと喧嘩したこともあったが、今では彼女の個性と受け入れることができた。

功太はストレートティに角砂糖を三つ入れ、テーブルに置いた。

「砂糖、いくつ入れた？」

「三つ」

「さっすが。褒めてつかわす」

子供のような笑顔を咲かせたあと、間髪入れずに紅茶を手取る。舐めるようにして熱さを確認し、まだ飲めないと判断してカップを置いた。

「熱い」

「そりゃあそうでしょ」

「お客様に対する配慮がかけてると思わないか？」

「仕事中の幼馴染に対する配慮が欠けていると思わない？」

「どうせ始業も終業も自由なんだから。この自由業め」

「頼むから他人の前では自由業って言うなよ？ ヤの付く仕事と勘違いされるだろ」

「冗談を交えながら、お互いの近況報告をする。基本的に功太は図書館から出ないため（生活用品は雇い主が功太の監視がてら支給してくれている）、一ヶ月ぶりの再会だった。一通り会話に花を咲かせたあと、功太が注意深く聞いた。

「で、今日は何しにきたの？」

香は冗談は好きだがそこまで非常識ではない。単に話したいだけなら、普段は土日を狙って訪問していた。

「うむ。実はな。何故だか知らないが昨日から私の影が無いんだ」  
ポカンとする功太だったが、すぐにあることに気がついた。座っている香の、影がない。淡いオレンジの蛍光灯に照らされた彼女の落とす黒い染みが、どこを探しても存在しなかった。この図書館の本を読み耽った功太の頭に、ある民話が浮かんだ。影喰い。日本に伝わる妖怪の一種だった。俯きながら、必死で影喰いについての情

報を頭の中から引き出してゆく。得ることのできた情報の量に満足すると、顔を上げて香の顔を見た。

「そりゃ影喰いだ」

「影喰い？」

今度は香が呆気にとられる番だった。功太に相談しても仕方がないと思っただけに、わずか数秒の間に固有名詞が帰ってくると思わなかったのだ。

功太は慎重に言葉を選ぶ。冬にもかかわらず、髪から汗が垂れるのが分かった。

「ああ。どこぞに伝わる妖怪だ。人の影を喰うから影喰い。影喰いに影を持ってかれた奴は、自分の一番大切なモノを殺さないと近い内に死ぬらしいぞ」

「それは難儀だな」

影喰いの報告例はかなり多かった。大切なものを殺して助かった例も多いが、殺せずに死んだ例も多い。香はかなり深刻な状態にあった。

「一番大切なものを殺すというのは、人じゃなきゃいけないのか？」

「いや。馬を殺してなんとかなった例もあるし、人以外でも大丈夫だろう。人以外で心当たりがあるのか。人を殺さずに生き残れるのはラッキーだな。地下の書庫に、資料が結構あるが……探してみよう」

「いや、いい。ところで功太。もう一つ話があるのだが」

「なんだ？」

香は姿勢を正して功太を見つめた。いつにない真剣な表情に胸が高鳴ると同時に、深刻な話なのかと不安に駆られた。

「うむ。実はな。私、お前のことが大好きだ。結婚を前提にお付き合いしてくれ」

わずかな硬直の後、呆れたように口を開いた。

「……なんだろう、この死刑宣告されてる感じ。かつてないほど嬉しくないタイミングの告白だわ」

「安心してくれ。私もほんの六十年くらいで同じ場所へゆく」

「結構がつつり生きるんだな」

「功太の命を貰って生きるようなものだからな。六十年でも足りないくらいだ」

香は紅茶をすすった。紅茶味の砂糖と言っても差し支えないそれを美味しそうに飲むのを見て、功太は苦笑いした。

「まあとにかく。俺は殺されたくないのですさつさと貯蔵庫行ってそれ以外の方法調べようか」

香は考えるような動作を見せたあと、人懐こい顔を功太に向ける。

「私は功太でも一向に構わないが」

「俺が構うので協力してください」

「そうか。残念だ」

貯蔵庫は地下にあるので、痛く冷える。電気ストーブが設置してあるものの、広大な部屋なので目に見える効果は無かった。しかしコートを着てしまうと作業効率が落ちるため、功太はヒートテックを愛用していた。ヒートテックに長袖を一、二枚。その上にワイシヤツとスーツを着ても、それでも室内の空気は功太の血液を凍らせた。

「この寒さに耐えるくらいなら功太を殺したほうがマシなんだが」

「本当になんで君に告白されたのかわからなくなってきた」

「大好きだぞ、功太」

「でも殺すんだ」

「うむ」

「まあいいか。影喰いのような民話タイプのもは二番と三番の棚にある。……とは言っても、半数以上の本が未整理のままだけなお前はそこを頼む。俺は未整理のものを探してるから」

「了解した」

功太は三 六番の棚から順に本を確認していく。三十六番は本来小説の類が置かれているはずのだが、百科事典や心理学入門など

あらゆる本が入り交じっていた。その中に影喰いについての図書がないか念入りに探す。単調で疲れる作業だが、慣れたものだった。わずか十数秒で確認を終え、隣の棚へ移動する。それを三、四回繰り返したところで、香から声がかかった。

「私はひらめいたのだが」

「どうした藪から棒に。というか、一番と二番を見てくれっていったら。そこ、三 二番なんだけど」

「そんなことはどうでもいい」

一蹴され、功太も仕方なく香の言葉に耳を傾けることにする。本棚から視線を逸らし、香の整った顔を見つめる。

「影喰いって、いつそステータスにできないだろうか」

「と、言うത്？」

「今、巷で影喰い系女子がアツい！」

「お前は影喰い系じゃなくて影喰われ系だ」

「む、一理ある」

香は顎に手をやり、考える仕草をする。幼い頃に探偵アニメの真似事をしていて身についた癖だった。

「ではこれはどうだ」

「今度はなんだ」

「今、影喰い界で新藤香がブーム！」

「名指しか。ブームもなにもお前このままだと死ぬんだけど」

「じゃあ功太を殺すしかないな」

「殺されないために努力してるんだけどね」

「うむ。手伝おう」

それを合図に、二人はもう一度探索に戻った。

相変わらずの速度で本の識別をする功太に対し、香はたどたどしい。一段見終わってはもう一度同じ場所を見直し、途中で詰まっては一旦戻る。本人の不器用さもあるが、熱心に探しているとは言い難かった。

三時間が経ち、二人は一度リビングに戻った。いくつかの文献は見つかったものの、そのどれもが影喰いの被害や民話を示すものであり、解決法は「大切なものを殺す」としか記されていないかった。

「一つ疑問があるのだが」

功太はソファで集めた文献を捲っていた。地下でも軽く目を通したが、しっかり読み込めばなにか書いてあるかもしれない。一方の香はというと、本日のカロリー上限を先程の砂糖紅茶で終えてしまったため、ぼんやりと功太の様子を眺めていた。

「なんだ。何か分かったか？」

「いや。もし私が功太を殺したら、私は功太よりも自分の命を選んだことになるよな？」

「まあ、そうなるな」

「それだと私の一番大切なものは功太ではなく私の命だということになる。よって大切なものが殺せていないから死ぬ。が、功太を殺さずにいると、自分の命よりも功太を選んだことになり、死ぬ。なにこれ」

「……でも、文献では自分の大切なものを殺した奴は生き残っているみたいだぞ。自分の一番大切な物って、ただし自分の命は除く、って感じじゃないのか」

「ふむ」

がらにもなく真面目な顔で顎に手を当てる香。何を考えているのか予想がつかず、功太も手を止めて香の顔を見つめた。

性格さえ直せば、良い顔立ちをしていると思う。目は程よく離れており、平均よりも大きい。ジト目気味なところが気になるものの、全体的な顔のバランスはかなり美人と言えた。あとは細すぎる身体さえなんとかすれば、渋谷を歩くだけで仕事が見つかるだろう。

「そもそも、一番大切なものとはなんなのだろう。何と比較して、一番だと結論付けるのだろうか。この世には比べられるものの方が少ないというのに」

驚くほどまともな意見に、功太は目を丸くした。香のこんな真摯な様子は長い付き合いで初めて見るものだった。一見した様子では判断がつかないが、意外と影喰いが響いているのかもしれない。当然か、と功太は思い直す。誰だって死が目前に迫れば、落ち着いては居られないだろう。彼女なりの焦燥なのかもしれない。

事実、彼女の状況はかなり悪かった。一番早い例では、影を喰われた当日の夕方には死んでいる。香は二日目。いつ死ぬことになってもおかしくない状態だった。

「ま、影喰いさんにはそこら辺の事情は汲めないのだろうよ。なんせ妖怪だからさ。人間の都合なんて構わないだろう」  
「なるほどな」

そう言っつて、香は目を閉じた。何を考えているのか。いくら眺めても、答えは出なかつた。功太は仕方なく視線を文献に移し、調べ物の続きをすることにした。ハッピーエンドを迎えるために。

「あ、そうだ功太。紅茶をくれないか」  
突然の申し出に、困惑する。一秒も無駄にできないとは思いつつ、彼女らしい言葉にほっとする自分を感じていた。

「はいよ」  
キッチンに向かい、紅茶の準備をする。少し高いティーパックを使ったストレートティ。角砂糖が三つ。昔から、香が大好きな味だった。

お湯をカップに入れ、パックを蒸す。指定された時間よりもじつくりと蒸した後、パックを取り出して角砂糖を溶かした。良くかき混ぜて、リビングへ。

「出来たぞ」

「砂糖は？」

「三つ」

「さすがだ」

テーブルに置くと、食器が擦れる音がした。時計の秒針の音が緩やかに響く。香はまだ目を瞑って沈黙していた。

二、三分ほど経って、紅茶がほどよく冷めた頃。香はそのジト目を開き、紅茶を手に取った。

そして彼女はカップを口に持っていくことなく、おおきく振りかぶって壁に投げつける。中身は振りかぶった際に飛び散り、ソファやテーブル、絨毯を紅色に染める。カップは鈍い音を立てて壁にぶつかり、破片を飛ばした。割れてはいないものの、小さな欠片が辺りに飛び散った。

功太が目を見開いてその様子を眺めていると、香は振り返って笑った。

「これで、よし」

なんのことか分からずうろたえていると、香の足元からみるみる内に黒い染みが広がっていった。それは人の形を描きながら膨張し、香とそっくりな形で止まった。

「えっと、これはつまり？」

「どうした功太。一番大切なモノを殺せば良かったのだろう？」

「それが、紅茶？」

「砂糖が三つな」

功太は静かに文献を閉じた。

「うむ。助かったぞ。これで死ぬことはなさそうだ」

「俺、驚くくらい何もしてないんだけど。ついでに今までの時間驚くくらい無駄だったんだけど」

「いやいや。いい機会になった。やはり私はお前が大好きなようだ」

「……君の中で思いつきり紅茶、大なり俺って式が出来ることが判明したんだけど」

「ああ。私は君の淹れるストレートティが大好きだ」

それだけ告げると、香は玄関へと歩きだした。それを追うこともできずに、功太は立ち尽くしていた。

「また今度来るぞ。それじゃあな」

扉が締まる音がしてから数十秒。途方にくれていた功太が、文献を一つ、また一つと腕に抱え始めた。おおよそ十を数えたところで、

功太の腕が一杯になる。全てを片付けるには、一、二往復する必要がありそうだ。

「さて、仕事に戻りますか」

冬の肌寒さを感じながら、功太は階段を降りていくのだった。

## 「妖の声と追ひ犬と」

影喰い事件から二日後の金曜日、荻原功太は蔵書の整理に精を出していた。朝早くから電気ストーブを入れ、もう六時間になる。それでも冷える貯蔵庫は、まるで人の侵入を拒んでいるかのようだった。ここは妖のような存在がいるべき場所で、自分のような一般人は足を踏み入れてはいけないのではないだろうか。夜、誰もいない間に本は飛び交い、人にあらざるものたちが踊り回る。そんな途方もない想像をしながら、功太は単調な仕事の暇をつぶしていた。

功太は休日の予定を考へることがない。絶望的なまでの出不精である彼は、休日も籠もりきりだった。図書館には彼が立ち入ったことのない部屋が無数にある。しかしそういった未知の領域に心惹かれるほど、彼は好奇心旺盛な男ではなかった。

オレンジの蛍光灯が貯蔵庫を薄暗く照らす。静謐な地下室に功太の足音だけが響く様子は、ひどく不気味だった。図書館の棚には番号が振ってあり、それに応じたジャンルを五十音順で並べていた。若い番号の棚の中から、あるべきでない本を探し出し、手にとる。乱雑に放り込まれた蔵書をどうにかしないことにはダンボールに詰まった大量の本にまで手が回らない。功太が図書館に来て二ヶ月になるが、本棚の整理はまだ半分も終わっていない。この図書館の膨大さに功太は呆れ返った。よくもこれほどの「曰く付き」を集められたものだ。管理人に対して畏怖の念すら抱く。

百十四番の棚を整理していると、階段の軋む鈍い音がした。誰かが地下貯蔵庫に降りてきたようだ。管理人が来るのは毎週日曜日と決まっているし、わざわざこんな辺鄙な場所まで来るような友人は一人しかいなかった。

「功太、いるか？」

ただっ広い地下室に、澄んだ声が反響した。功太は手に持った本を一旦棚に戻し、階段の方へと向かった。

「また今度、がまさか二日後とは思わなかった」

「うむ。私も思わなかった」

ピンと張った空気が新藤香の言葉を白く染色した。それを見て、功太は今更のように寒さを思い出す。手も足も、すっかり感覚がなくなっていた。

「とりあえず、リビングにいこうか」

功太は香の背中を押して、軋む木製の階段を上っていった。

「しかし、不思議な建物だなここは」

甘い紅茶を啜りながら、香は無表情に言った。砂糖が三つ。図書館に来るたびに、香が要求するものだった。功太もすっかり慣れてしまい、紅茶だけは常に在庫がある。功太自身も無糖であれば嫌いでなく、苦味と香りを楽しんでいた。

「不思議、というと？」

「外よりも中の方が遙かに寒い。一階は暖房を入れればそれなりだが、地下は足を踏み入れたたくもない」

「住めば都、じゃないけどさ。慣れればどうということはない」

「そういうレベルの寒さじゃないと思うが」

「マイナス五十度の地域で暮らしている人も世界にはいるわけだし。男は度胸。何でも慣れてみるもんさ」

「おまえほど度胸が似合わない奴も珍しいぞ引きこもり」

「ぐうの音でもない」

そこで二人の会話は途切れた。香が紅茶に手を付けると、無意識に功太もそれを真似る。秒針の音が二人の耳を抜けた。

「で、あんまり聞きたくないんだけど、今日はどうしてきたの？」

「うむ。そうだな」

香は土日や祝日を中心に訪れる。平日は香も大学があるし、何か緊急の用があるとき以外、滅多に来ることはなかった。香が両手を

組んでテーブルの上に乗せた。わずかに揺れた黒髪から、シャンプーの甘い匂いが漂ってくる。子供の頃から変わらない、香の匂いだっただ。

「一昨日の帰宅中に、妙なものに尾行されたのだが」

「妙なもの？」

香は、性格はさておき容姿は良い。ストーカーに目を付けられても納得できる節がある。だが、功太は「妙なもの」と言い回しに不吉な違和を感じた。それに一昨日の帰りというのは、もちろんこの図書館からの帰宅を指すのだろう。ここに来るためには山道を車で二十分近く走らせる必要があり、香も自動車を足にしていた。ストーカーが車を追いかける、というのは少しおかしな話だ。

「ああ。犬人間……とでも言おうか。四足歩行をしていたが、犬にしては異様に長い手足で、痩せた人間みただった。顔は犬そのものだ」

犬人間、という言葉に功太は聞き覚えがなかった。一瞬困惑するも、冷静に香の表現した生物を想像する。名状し難い生物が頭の中に出来上がったが、その像にはかすかに見覚えがあった。

「……ん、なんとなく記憶にあるような。ちよつと待っていてくれ。功太は走るようにして貯蔵庫へ向かった。

十分も経たずに、一冊の古びた本を持って来る。和綴じされたそれは正式な蔵書というよりは、個人的なレポートに近い印象を受けた。

テーブルの上にそれを置くと、素早く該当ページを開いた。

「追い犬……か。ああ、そうだ。ちよつとこんな感じだった」

香が声を上げる。開いたページには「追い犬」と呼ばれる妖怪の絵と、説明文が載っていた。絵は香が形容した通りで、ちよつと犬と人間の中間のような容姿をしていた。白黒なので色まではわからないが、全身を長い毛で覆われている。原始人の顔を犬にして、四足歩行させたような姿だった。

こんな化け物に追われて冷静にいることは難しい。それにも関わ

らず良く記憶していた香に感服しつつ、功太は文章を読み上げた。  
「夕方から夜にかけて、一人で歩く女性の後ろを追いかける妖怪」  
「変態だな」

香が野次を飛ばす。妖怪が変態、という妙な組み合わせに、功太は頬が緩むのをこらえた。

「相手が転ぶのを今か今かと待ち、追い犬が見ている間に転ぶと喰い殺されてしまう」

「獣姦とはマニアックな」

「うん、ちよつと黙ろうか。家に帰ったらまず足を洗い、見送りありがとつ、と言うともう追われることはない　だそうだ」

「ふむ。捕まえる方法は載ってないのか？」

「えっ」

「ペットにしようかなと」

「かわいくなさすぎる」

「猫とかと似たようなものだろう」

「猫は人を喰わん。……ま、第一妖怪を捕まえるなんて無理だろ」

「そうか、残念だ」

頭を垂れて本当に残念そうにするあたりが香らしい。淡泊な黒のコートに落ちた黒髪が、哀愁を漂わせる。

「なら功太が私のペットになってくれてもいいぞ」

「本当に申し訳ないが俺にその手の趣味はない」

「やあよ、やあよ」

「そつちの趣味もない」

「……。そうか」

貯蔵庫に比べてリビングは狭く、暖まりやすい。室温は十八度を越え、コートで居るには少し暖かすぎる。香はコートを脱いで脇に置いた。胸元に白いフリルがついた黒ベースのブラウスと、紅色のスカートが露わになる。防寒対策であろうニーソックスは、ただでさえ細い彼女の足をさらに細く見せた。

「相変わらず病的に細い足だな。いい加減、ダイエット止めたらど

うだ

「女子の世界ではこれでようやく細かいかな、ぐらいだそうだ」

傍若無人な彼女を見てきた功太にとって、眉唾な発言だった。一般的な女の子と同じように、他人の目を気にする香など想像もつかなかった。

「恐ろしい世界だな」

「ああ。そろそろ飽きてきたし、止めるかな」

「飽きてきた？」

「ダイエツトって流行の遊びのようなものだろう？ だから試してみたのだが、特に面白いとも思えなくてな。日進月歩と聞いたから長い間やってみたのだが」

皮肉めいた台詞だ。今の台詞を大学で言おうものなら、陰口を盛大にたたかれることになるだろう。苦笑しつつも、やめるという言葉に功太は安堵した。

「ときに、今日は追い犬の件できたんだろ？ どうするんだこれから」

「とりあえず」

香は笑顔で、空になった花柄のティーカップを突き出した。

「紅茶を淹れてくれるか。久しぶりにたらふく飲める」

紅茶を二杯飲みきった香は、コートを羽織った。あまり遅くなるのと、暗い山道をゆくことになってしまふ。まだ十五時で外は明るい。が、これ以上の長居はできなかった。

「さて、行こうか」

そう行つて功太を促す。功太は怪訝そうに香を見た。

「行くつて、俺も？」

「何を言ってるんだ。お前がこないと追い犬が捕まえられないだろう」

「あれ本気だったんだ」

「うむ。というわけで、歩きで途中までついてきてくれ。私も速度

を緩めて運転するから」

言い出したら止まらない。功太はげんなりした素振りをしてながらも穏やかに笑った。壁に掛けてあるシヨルダーバッグを手に取り、出掛けの準備をする。時計代わりの携帯電話、財布、図書館の鍵はすでに鞆の中に入っていた。それを確認している功太の手が、不意に止まる。思案顔で天井を仰いだ後、香を振り返った。

「なあ。追い犬を捕まえるって何を持って行けばいいんだ」

「愛と勇気」

「追い犬は擬人化細菌かなんかなのか」

「じゃあ四十四口径自動拳銃と散弾銃」

「愛と勇気よりは捕まえられそうだ。持ってないけど」

「よし、じゃあ行くか」

「要するに丸腰ってことね」

功太はシヨルダーバッグを肩に掛けた。スーツとのアンバランスさがシヨールさを醸し出しているが、功太はまったく気にする様子を見せなかった。

玄関を開けると、冷たい空気が流れ込んでくる。長く暖房の利いた部屋に居たせいか、功太でさえ肌寒く感じさせた。張りつめた空気のレンズは、背丈の低い雑草が生えた広大な庭を、厳かに映し出していた。

何週間ぶりか、功太は外から鍵をかける。久しぶりの外出で、鋭い日差しが目染みだ。扉を何度か引き、施錠されたことを確認すると、香の真つ黒な車に向かって歩きだした。

「お前、黒好きだよな。車も、どうせ親に反対されたる」

香の両親は、彼女の黒好きを敬遠している。服も黒基調が多く、部屋の家具も香に選ばせると大抵のものが黒くなる。年頃の女の子の親としてはその趣向がどうにも心配なようだ。彼女の買い物に付き合っってはあれやこれやと口を出している。

「母も父も黒が嫌いみたいだ」

そう無邪気に言う姿を見て、功太は彼女の両親に同情する。両親

が嫌っているのは黒ではなく、黒に固執する性癖の方なのは誰の目にも明らかだった。

「そういえば。スカートは赤なんだな」

そういうと、香は自分のスカートを見た後にこれ見よがしに嫌な顔をした。

「……最近、両親の小言が酷くてな。今日も黒スカートだったんだが、酷く反対されて、妥協した」

「まあ心配してるんだよ」

「全く、憑き物でも憑いたようだ。功太はどう思う？ 赤いスカート」

「かわいいと思うよ。少なくとも、全身黒よりは」

「……そう、か」

香は目を伏せた。触れてはいけない点に触れてしまったかもしれない。功太が人知れず反省をしていると、先に沈黙を破つたのは香だった。

「まあ功太がそう言うならいいだろう」

「両親は駄目なの？」

「うむ」

庭を抜けて、門の前まで来る。不思議と錆の無い鉄の門扉は、気味悪く口を開いていた。

功太や香の車は敷地の外にある。不用心かもしれないが、そもそもここに来る人間自体が少ないので、問題が起きたことはなかった。香に至っては、車のキーを外さずに降りることもあるくらいだ。

「じゃあ私は車でゆっくり行くから、ストーキングしてくれ」

「わざわざ嫌な言い方するな。というか俺の帰りはどうするんだ？」

山道は車がやっと一台通れるくらいの幅だ。ターンするには図書館があるいは山の麓まで行く必要がある。功太が徒歩で付いていた後、香の車に乗せてもらった場合、一度山を下りてまた図書館に戻らなくてはいけなかった。

「？ 徒歩で帰るに決まっているだろう」

「ですよ。まあそうなりますよ。」

どこまで付いてゆくことになるかはわからないが、少なくとも香が納得するまでは歩くことになるだろう。そこからまた帰ることを考えると、酷く面倒なことに思えた。

だが、功太に反論する術はない。功太自身が香を受け入れている以上、双方の力関係は改善の余地がない。

ゆっくりとした速度で香の車が発進する。十メートル程度差が開いてから功太も歩き出す。本来ならもっと距離をあげ、香が追い犬を見つけた時点で詰めるべきだ。しかし携帯電話が使えない以上連絡の手段が無い。仕方が無く、二人はお互いが視認できる距離に留まった。

歩きだして十五分ほど経った。今回は徒歩と同じくらいのスピードで進んでいるため、十五分経った今も中間点にすら来ていなかった。しかしこれ以上進むと、さすがに功太の帰りが辛い。そろそろ香に声を掛けてあきらめさせようか。そう考えていたとき、功太の後方から低い低い声がした。

「お前は、あの娘の見送りか？」

生々しい血と肉の臭いがした。獣の臭いだ。普段見慣れている牛や豚の死肉からは漂うことの無い、生きた臭い。そのグロテスクなまでの臨場感。功太が振り返ると、そこには痩せ細った犬のようなものがいた。薄暗い空気がその姿をぼんやりの映し出す。異様に長い手足に、肩の骨が突き出ている。身体は茶色の体毛に覆われており、目は鋭利な殺意を功太に向けていた。

唾然として返事に窮する功太に、追い犬はさらに言葉をかける。

「もう一度問う。お前はあの娘の見送りか？」

その奇怪な見た目はなんなのか。何故犬がしゃべっているのか。それらの疑問を押し殺すほどの気迫が、追い犬にはあった。しどろもどろに功太は答える。

「いや、えっと……一応、見送り、です」

威圧的な重低音はいくらか緩和され、功太に対して好意的なものへと変化した。

「そうか。ここらは危ない。あの洋館にも二度と近づかせないことだ」

功太は安堵し、追い犬が害を与える存在ではないことを理解する。それどころか、香の身を察じてさえいる。その事実には、功太は異形の追い犬にかすかな親近感を覚えた。

「犬っぽいのがしゃべってる……」

恐怖が消えた途端、功太の口から出た言葉はそれだった。さすがにまずかったと慌てて功太は口を手で覆うが、追い犬は笑うように口元を上げた。

「ほう。私が怖くないのか人間」

「怖いよりも、しゃべっているところが」

「……まあ良い」

こちらの様子が見えたのか、香が車を降りて走り寄ってくる。追い犬はそれを合図に俊敏な動きで森へ飛び込み、そのまま姿を消した。

「功太、今は」

珍しく興奮した様子で、香が叫ぶ。功太は先ほどまでの白昼夢のような展開に呆然としていた。

「……こうた？」

功太は昔から、怪異というものに恐怖を抱いたことがない。子供なら誰でも怯えた経験があるホラー番組の数々も、彼の背筋を凍らせたことはなかった。

しかし妖を目した功太は混乱していた。妖怪や霊と言うと、もっと曖昧で存在感の無い、空気のようなものだと思っていた。功太が初めて出会った妖怪は、空気と片づけられるにはあまりにも脈動していた。血の臭い、流れ。肉質。そのどれもが目に焼き付いて離れない。自失する功太の肩が小さい手でゆすられ、はっと目を覚ました。

「あ、ああ。大丈夫だ」

「追い犬はどうしたんだ？」

「ん、居なくなつたよ。……なんだか、お前を心配しているような口振りだった。というか犬がしゃべつてた」

「心配？ …… ああ、最近良く妖怪に話しかけられるからな。そのせいかもしれない」

「えっ」

「まあ、追い犬が居なくなつたなら仕方ない。私はもう帰るぞ。ありがとうな」

香は一直線に車へと向かった。乗り込み際に、

「また来るぞ」

とだけ言つて、器用に走り出してしまふ。

残された功太は唾然としながら立ち尽くしていた。空気はだんだんと夜の模様を映し始める。良く話かけられる、の意味を確認することはもうできない。薄暗さに目を慣らしながら、功太はゆっくりと図書館へ帰ってゆくのだった。

## 「禁字の本と管理人と」

日曜日の朝、功太はいつもよりも早く起きた。朝六時。管理人が来る一時間前だった。

一階のリビングは、朝七時に暖房が入るように設定してある。八時に起きるのが平常である功太にとって七時という設定は非常に都合がよい。眠い目をこすりながらリビングへ行けば、暖かい部屋が迎えてくれるからだ。……もっとも、暖かい、という表現は一般的に適切ではない。ここでの生活に慣れきった功太にとっては暖かく感じられる程度だ。

暖房が入るより一時間も早く起床した功太は、寝室から出るのを躊躇していた。眠気が抜けない内はどうにも温度に弱く、あまり寒いところへは行きたくない。とはいえ今日は管理人が来る日。わがままは言っていられない。暖房の予約を変更し忘れた自分を恨みつつ、功太は寝室を出た。

図書館の二階はまるで旅館のようになっていた。細い通路といくつもの扉があり、その扉はどれも別個の部屋に繋がっている。部屋の間取りは基本的には変わらず、功太が使っている部屋も例外ではない。

「使っていない部屋は埃だからでね。どうにも開けたくないのよ」  
管理人はそうこぼしていた。外観はそこまで年期の入った建物には見えないが、少なくとも功太が生まれるよりも早くに建っていたのは間違いさそうだった。

ため息も凍りそうな寒さの中、功太は暖房のスイッチを入れる。冬もいよいよ本番だ。

お湯を沸かしながら、一階のカーテンを開けた。一階間取りさえ功太はよくわかっていない。リビングにある窓と、玄関の隣にある小窓。功太が視認できる距離には、これしかなかった。部屋はまだまだあるようなのだが、その多くは鉄製の扉に鍵が掛かっており管

理人以外は入れない。日常生活する上で困らないので特に気にしたことは無かったが、異様な光景であるのは間違いなかった。

功太はテーブルに置いた赤いハードカバーの本を手にとった。先日、整理の最中に見つけたものだ。中はページ番号が振ってあるだけで、それ以外に黒い染みを見つけたことはできなかった。奇怪ではあるが、この図書館では別段珍しいものではない。普段なら「その他」の棚に保管して終わり、なのだが、今日は管理人との話の種にと持ってきたのだ。管理人ならこういった奇怪な本の由来も知っているはずだと、功太は考えた。

刺すような空気がいくらか揺らぎ始めた頃、玄関の開く音がした。時刻は七時ちょうど。開け放たれた扉から、背の高い茶髪の女性が入ってくる。この図書館の管理人であり、功太の雇い主の香坂冬美<sup>ユミ</sup>。茶色のロングコートに藍色のマフラー。包容力のある落ち着いた雰囲気は「大人の女性」を体現していた。化粧による白さよりもっともつと自然な肌の白さを有している。以前、功太は彼女を海外の生まれかと勘づいたが、彼女はやっぱりと否定していた。生まれつきなんだろうと納得したものの、改めて見ると日本人離れしていることは明らかだった。

「ああ、荻原君お疲れ様。荷物はいつものように積んであるから、あとで出しておいて頂戴」

マフラーを外しながら手際よく功太に挨拶をする。露わになった首もとが妙に色っぽくて、功太は息をのんだ。

「紅茶淹れておきましたので、よかつたらどうぞ。さっき淹れたばかりなのでまだ冷めてないと思います」

冬美は時間に遅れることがない。また、早く来ることもない。それをこの二ヶ月で十分承知していたので、冬美が来る時間になると紅茶を淹れておくことが功太なりのもてなしになっていた。

「ありがとう。いただくわ」

香坂冬美からマフラーを受け取り、功太は壁に掛けた。毎週日曜

日に行く形式的なやりとりだが、二人は違和感無くこなした。功太はその足で外に向かい、小室が持ってきた食料や日用品の山を取りに、車へと向かった。

功太は小型車につまった荷物の山をリビングに運び入れると、黒いソファに腰を下ろした。

「美味しいわね、これ。今度うちでも買おうかな……」

功太が買っている　実際に購入しているのは冬美だが　紅茶は、よく大型ショッピングモールで見るとは冬美だが　紅茶の味はわかる人間が買う代物でもない。功太も新藤香も、紅茶についてはドのつく素人だ。彼らは良く紅茶を嗜むが、香にとっては「功太に淹れてもらう」ことに意義があるのだし、功太にとっては、安物も高級も値段以外の差はなかった。

功太が社交辞令のような言葉を返そうとしたとき、冬美はテーブルの上においてある一冊の本に気づいたようだった。赤い表紙に、ミミズが這ったような金色の筋が彫り込まれている。功太が地下室から持ってきた本だった。

「これは？」

「ああ。これはですね……ほら」

功太は本を手に取り、中身を冬美に見せた。中身が白紙になっているのを見て、彼女は納得したようにうなずいた。

「その本、手にとって大丈夫？　何ともない？」

「何ともない、ですが……」

しどろもどろに答える。ここ最近、香の絡みで妙な現象に巻き込まれることが多い。それを警戒してのことだった。

「それ、妖怪の一種よ。ただの本に見えるでしょうけど」

何となく予想が付いていた功太は、またかとうなだれた。慌てて本を手放す。

「どんな妖怪なんですか。というか、何で妖怪が平然と貯蔵庫に混

じってるんですか」

「まあそういう図書館だからねえ」

そもそも、そういったトラブルも込みで功太の給料は定められている。給与査定者である冬美が「そういう場所だから」というのだから、納得するほか無かった。

「そのまんまだけど、金字の本とか呼ばれてるわね。「金の文字」で金字だけど、昔は「字を禁じる」で禁字だったとか。内容的には……過去を映す鏡とかと同じ感じかしら。ちょっと制約はあるけど」「制約?」

「ええ。金字の本は、最初に手にとった人間の過去を、次に手を取った人間に映すの」

「じゃあ今、香坂さんが手に取ったら俺の過去が見えるってことですか?」

「普通はね。でも、荻原君の場合はそうもいかないと思うわ」「……と、言いますと?」

冬美は言葉を区切って、花柄のティーカップを手にとった。会話の途中に水分を含むのはいくつかの意味がある。一つは喉を潤すため。そしてもう一つは、会話の雰囲気静かで、真面目なものに変えるため。冬美の場合はこれだった。

「荻原君。ここの仕事の採用基準って、何だと思う?」

「えつと……え?」

唐突な質問に、功太は答えることができなかった。対する冬美はいたずらな目をしていた。からかい半分といった感じだ。たてた人差し指の赤いマニキュアと、白色の肌とのコントラストが功太の目を引きつけた。

「正解は、妖怪とか、人の死とかに耐性があること。ここにはそういった類の本がたくさんある。妖怪のほかにも、首吊り自殺の台として使った本とか、鈍器として使われた辞書とかね。だから、そういうものに対して強いつてというのが絶対条件なの」

「でも俺、死体どころか血も人並みにしか見たことないし、妖怪も

……この図書館に来て初めて実在するんだって思いましたよ」

冬美は小気味良く笑った。功太の反論が少し的外れだったらしい。「ごめんね、違うの。私が言った耐性というのは、ほとんど生まれ付き備わっているものなのよ。人間と妖怪ってお互いにお互いを害す毒電波？　みたいなものを持つてるの。ちよつと語弊が過ぎる気がするけど……。文献に見られる、妖怪による被害の大半はこれのせいよ。で、荻原君のような人は、生まれ付きその電波の影響を受けない体質なの」

「ん……。よくわからなかつたです」

「人間って、個人個人でパーソナルゾーンを持つてるでしょう？　赤の他人が入ると不愉快に感じる距離、って聞いたことないかしら。そのパーソナルゾーンは妖怪も持っているの。それで、妖怪が人間の、あるいは人間が妖怪のパーソナルゾーンに入ると、妖怪にとっても人間にとっても悪い影響を及ぼすのよ」

功太はその具体例を知っていた。数日前の「影喰い」事件だ。沙弥の話を鵜呑みにするのなら、あの事件は「影喰い」と「新藤香」のパーソナルゾーンが重なったことで起きたことになる。そこに影喰いの悪意は無い。影喰いは悪意をもって新藤香を襲ったのではなく、純粹に二人が近くに居てしまったことが問題だったのだ。

「なんとなくわかりました。ようするに、お互いが近くに居ると良くないことが起こると。それで、耐性というのは？」

「まあその悪影響を与えないし受けないって考えればいいかな。だから、あなたは近くに妖怪がいても特に不利益を被ることはないんじゃないかしら。たぶん」

「たぶんって何ですかたぶんって」

「ここ二ヶ月、特になにもなかつたのでしょう？　だったら大丈夫よ」

確かにその通りだった。ここ数日起きた出来事も香絡みであったし、半分以上は香がややこしくした面がある。功太にとって今の仕事や環境は十分に満足できるものだったし、別に「大丈夫」じゃない

くても、この仕事を降りるといふ選択肢は無かった。

「まあいいですけどね。それなりにおいしい仕事だし」

「そうよねえ。もうちょっと給料下げてもいいかしら」

「勘弁してください」

冬美はからからと笑った。その後も、冗談を交えながら世間話を進めてゆく。香との会話とはまたひと味違うが、不快なものではない。功太とは雇い主と雇用者という関係だが、そういった社会的な階級がなければ、二人は良い友人になるに違いなかった。

二杯目の紅茶も冷めてきた頃、話題は一周回って金字の本に戻っていた。功太は冬美の語る、金字の本によって起きた厄災や奇談を面白がった。自分からアクションを起こすほど彼に好奇心はないが、与えられる情報や知識を楽しむ程度の興味はあった。

「人の過去を見せる、か。俺、香坂さんの過去とか興味あるなあ」

「私？ 別に面白いものでも無いと思うけど……。まあどちらにせよ、私に金字の本は使えないけどね」

疑問が功太の頭を捕らえたが、それはすぐに解消された。この図書館の雇用条件が「妖怪に耐性があること」ならば、管理人たる彼女もあつてしかるべきだといふところまで思考が至ったのだ。

「残念です」

時計の針はちょうど真上で重なっていた。そろそろ腹の虫が鳴き始める時間だ。功太はソファから立ち上がった。

「何か作りますよ」

意気揚々と巡撫する功太を、冬美はやんわりと辞退した。すつかり雑談に夢中になってしまったが、彼女は仕事でここに来ているのだ。まずは仕事を片づけなくてはいけない。立ち上がりながら、セミロングの茶髪を整えた。

「ありがとう。軽食はいくらか持ってきているから大丈夫よ。さつさと仕事を済ませて帰ることにするわ」

手伝います、と功太は申し出たが、冬美は断った。図書館の重要な仕事は彼女にしかできないし、それ以外の人間にさせてはいけな

い物だった。冬美は和やかに笑って、道具を取りに車へと戻っていくのだった。

「これで、よじつと」

図書館の最奥に、冬美の姿はあった。彼女の前には厚い気密扉がある。鉄製の扉は無機質に口を閉じていた。気密扉の用途は様々だが、少なくとも一般的な図書館にある物ではない。国宝級の書物がある国立図書館は別だろうが、少なくとも山奥の人のいない建物に必要な代物ではない……。

冬美はもう一度施錠したことを確認し、扉から離れた。あたりの色は功太が生活している場所と代わりは無い。木を模したフローリングに白い壁、青白い蛍光灯。一般的な図書館と比べると違和感があるが、来客を想定した図書館ではなく、蔵書の保管を目的としているのだからこうなるのだろう。

いくらか通路をいくと、そこにも大きな鉄製の扉があった。巨大な南京錠で施錠されており、まるで牢獄か、あるいは怪しげな宗教の聖域かのようにだった。冬美は軽々とその南京錠を持ち上げ、手に持った銀色の鍵で開錠した。扉をくぐり抜けた後、彼女は再び南京錠を扉にかける。万に一つでも人が侵入してこないように、扉を閉める度に施錠するのが決まりだった。「人が侵入してこないように」なんていうのは遠回しな言い方だ。こんなへんぴな図書館に訪れる人などほとんどいない。この重々しい鍵は「荻原功太」という一人を入らせない為のものと言っても差し支え無かった。

どうやって入ってきたのか、いつのまにか冬美の隣には一匹の獣がいた。茶色の毛といびつな手足。かすかな腐敗と血肉の臭い。そして犬のような顔。以前、功太が目撃した追い犬だった。

追い犬はその鋭い犬歯や臼歯をちらつかせながら、隣の女性に声をかけた。

「随分と悠長なことをするのだな。あの人間がきて、もう二ヶ月以上経つだろう」

冬美は追い犬が日本語を語ったことに驚きもしなかった。普段功太には見せないような鋭い視線で追い犬を刺す。そこに柔らかな妖艶さはなく、狡猾な狐を思わせた。

「私は悠長だとは思わないわ。彼にとつて必要な時間よ」

追い犬は怪訝な顔をした。値踏みするように冬美を見る。追い犬の野性を宿した瞳に睨まれても、冬美は動揺を見せない。

「私は急いだ方がよいと思うのだがね。急を要すると嘆いていたのは主だろうに」

「……あなた、勝手に彼と接触したんですってね」

「荻原功太にこれ以上の猶予を与える必然性は無い」

怒りを含んだ声だった。獣に敵意を向けられるというのは想像以上に恐ろしいことだ。修羅場に慣れていない人間なら、それだけで腰を抜かしてしまうかもしれない。しかし、冬美は全くひるまなかつた。それどころか、その程度の弁論は予測していたかのように、素早く返答した。

「天子テンゴの件は天狐に一任しているはず。あまり勝手な行動をしないで」

「娘の方はどうするつもりだ？ 事故は一度キリとは言い切れないだろう。それに、我々に敵対心を持つものだっている。そういう者どもが、娘に手をかけないとなぜ言える」

「……新藤香は、あなたが見てくれているのでしょうか？」

冬美はくすくすと笑う。小馬鹿にしていると言うよりは、口では強く当たりながらも味方になってくれる追い犬に笑みをこぼさざるを得ないといった感じだ。

「それだつて完璧じゃない。現に、影喰いに魅入られた」

「どちらにせよ、彼女をこの図書館から遠ざけるといふ選択肢はとれないわ。天子の方を何とかしない限りね。新藤香の安全は、天子の契約がすまない以上は保証しかねるわ」

試すような言い方だった。名高い追い犬ともあるうものが、人間一人の安否を何故そこまで気にするのか。そう、責めているようにも聞こえた。

「……まあ良い。迅速に頼むぞ」

言い終わると同時に、追い犬は風のように姿を消した。どういった術によるものなのかは冬美も知らない。冬美は肩の力を抜くようにしておおきく息を吐いた。追い犬の意見はもつともだ。今週中、できれば数日中には結果が欲しい。

「水曜日くらいが、妥当かしらね」

手を挙げて身体を延ばし、うめく。　悩み事の多いこと。それが彼女の仕事なのだ和理解しつつも、ぼやかずにはいられなかった。

再び長い通路を歩き、重い扉をもう一つ開けると、見慣れた場所に着く。図書館一階のリビングだ。功太はソファで本を読んでいた。冬美が帰ってきたことに気づき、立ち上がる。

「お疲れさまです」

「ええ」

少し疲れた様子の冬美に、功太はそれ以上言及しなかった。食事や紅茶を勧めたものの、彼女は体よく辞退する。

「今週の水曜日にまた来ようと思うのだけど、大丈夫？」

「え？ ええ、まあ」

冬美が平日に姿を現すことは一度もなかった。毎週日曜日。これを崩したのは、はじめてのことだった。

「じゃあ、よろしくね」

それだけ言うと冬美は図書館から出ていった。普段では考えられないような淡泊さに唖然としてしまう。仕事が上手くいかなかったのかな、程度で納得した。その仕事の内容さえ、彼は知らないけれど。

特に意識もせず、金字の本を手を取った。もしこれが高坂冬美に使えたなら、彼女の憂いの理由もわかるのだろうか。一人、嘲う。栓のないことだ。功太は本をテーブルに置き、キッチンへ向かう。

夕飯まで随分と時間がある。読書にふける前に、洗い物の一つでも済ませてしまおう。冬美の様子を片隅に添えながら、緑色のスポンジに洗剤を垂らすのだった。

「淡い同棲とスネコスリと」

朝起きて、荻原功太は足に違和感を覚えた。何か余計なものが脛にくっついているような居心地の悪さがあった。捻挫をして腫れた時の感覚に似ている。その正体を確かめようと、功太は思い切り布団を捲った。

自分の脚が目に入った途端、時間が止まった気がした。人は予想外のことが起こると十数秒もの間リアクションが取れなくなると言われている。今の功太の状態はまさにそうだった。十秒くらいの間布団を捲ったままで制止し、そしてようやく固まっている自分に気づいて、息を吐いた。

なんだ、これ。

功太の脛の上に、オコジヨのような生物がいた。黒味を帯びた茶色の体毛が、腹のほうだけ白くなっている。ふわふわとした容姿が猫や犬のような愛玩動物を思わせる。功太は猫にするように、優しく胸を掴み顔の前へと連れてきた。功太の目とその生物のつぶらな瞳が交差する。

「……………。なんだこれ……………」

うっかり独り言を漏らしてしまう。一人暮らしをすると独り言が多くなるというが、その話を功太は今初めて信じた。じつと小動物を見つめる。狐のような耳に、オコジヨの様に細長い胴体。多くの四足動物と同じように体毛に覆われた四足。

「もしかして」

すっかり独り言に抵抗を覚えなくなってしまった。口にしてから、功太は苦笑いする。

スネコスリという妖怪がいた記憶がある。その名の通り人間の脛を擦り続けるだけの妖怪だ。基本的に害は無い上に（もつとも、冬美の話では妖怪が近くににいるだけで厄災が起こるらしいが）愛玩動物のような見た目をしているので、妙な言い方だが人気の高い妖怪

だった。

「お前、すねこすりで良いの？」

そう功太が問うと、すねこすりは頷くように何度も何度も首を縦に振った。日本語がわかるのかと感心する。追い犬といい、妖怪という生き物は日本語が公用語なのかと功太は考えた。妖怪は日本独自の生き物だと聞いたことすらある。あながち間違いではないのかもしれない。

ひとまず、功太はベッドから出た。予定時刻よりも随分遅れてしまったが問題ないだろう。壁にかかっている、シンプルなカレンダーを見た。二月の末の、月曜日だった。

顔を洗い、さて朝食をというところで、功太は重要なことに気付く。すねこすりは物を食べるのか。食べるとしたら、なにを与えべきなのか。先ほどからしつこく臍に頬ずりを続ける小動物を見る。どうやらそれが気持ちの良いい行為らしく、すねこすりはご満悦な顔をしていた。しゃがみ込んで、すねこすりと視線を合わせる。忙しなく動いていたすねこすりが、縫い止められたようにとまった。しばらくの沈黙。功太は「よし」と呟くと、勢い良く立ち上がった。

「ミルクでいいだろ」

そういった途端、功太の足取りを邪魔するかのごとく、すねこすりが動き回る。……やっていることは単に臍を擦っているだけだが、その行為を抗議と捕らえた功太の足が止まる。もう一度しゃがみ込んで、すねこすりをみた。

「ミルク」

そう呟くと、すねこすりは頭を大きく横に振った。あまりの形相に、そんなにいやかと呆れてしまう。

「水」

反応は相変わらず。水すら嫌がるとはどうということだどげんなりした。

「紅茶」

やけっぱちに言ったのだが、すねこすりは意外な反応を示した。金縛りにかかったように停止した後、今度は縦に首を振った。啞然としながらも、功太は紅茶の準備に取りかかった。

「とはいえ」

底の浅い皿に入った紅茶を、すねこすりは一心に飲んでいった。舐めた、のほろが表現としては適切かもしれない。短くざらざらした舌を出し入れしながら紅茶を汲み取っている。

水物だけじゃまずいだろうかと、功太は思考する。しかし物を食べさせるとなると、適当なものは与えられない。幸いすねこすりは日本語が通じるようであるし、直接聞けば良いか、と功太は一心不乱に紅茶を飲むすねこすりを流し見た。第一、すねこすりは今まで一体どこに居たのか。そしてどうやって暮らしていたのか。それを功太が知る術はなく、今のところは取り敢えず世話をするほかなかった。

トーストを貪りながら、今後のことを考えた。仮に飼うことになったとして、香坂冬美の許しは出るのか。許しが出なかった場合、自分にこの子を捨てる勇氣があるのか。

なんやかんや言ってもすねこすりの見た目は可愛く、無下にするには少し忍びない。功太の中の妖怪は、初めて会った追い犬のイメージが強かった。だからこそすねこすりの存在は意外であり、また好ましくもあった。功太は妖怪に恐怖も嫌悪も抱かなかったが、それでも追い犬は愛着の沸く見た目とは言い難かった。

あれこれと思考を待らせていると、玄関の開く音がした。それと同時に鈴を転がしたような声が聞こえる。

「功太、来たぞ」

黒いコートに身を包んだ細身の女性が入ってきた。白い吐息がどこことなく子供っぽさを表現していた。美人というよりは、可愛げ

のある容姿に、功太は目を細めた。

「どうした。平日にくるなんて……」

珍しい、と言いかけて、そうでもないなと思いついた。ここ最近、どういうわけか異常に来訪の多い新藤香をみた。今日もまたよくわからない事件を持ち込んできたのだろうか。そう勘ぐる功太に、香はほがらかに笑った。

「今日は違うぞ。泊まりにきた」

よく見ると、香は大きな旅行バッグを抱えていた。冗談ではないらしい。わざわざ香に伝わるように、功太は大きいため息をついた。

「また突拍子のないことを言う……」

「電話がないんだから仕方ない」

「電話はあるんだけどね」

香はどうもこの固定番号を覚ええない。携帯も圏外なため、来訪が唯一の情報伝達手段となっていた。

泊まるという言葉について詳細を訊こうとすると、香は紅茶を要求した。よくも飽きないものだ、と功太は思う。しかし、功太にとっても紅茶を差し出すことは一つの楽しみとなっていた。内向的で出不精の彼に訪れた、わずかな変化だった。

功太がキッチンにゆくと、香を垣間見て怯えるすねこすりが目に入った。功太が近づいたのを見ると、弾かれたように功太の脛にまとわりついた。

彼女がすねこすりの存在に気づく。水を得た魚とはよく言ったもので、まさにそんな魚のように目を輝かせた。

「功太、なんだそれ、なんだそれ」

「なぜ二回言った。……自称すねこすり。有名な妖怪だ」

香はすねこすりを刺激させないよう、ゆっくりと近づいた。二人の距離が二メートルを切った頃、突然すねこすりは尻尾を踏まれた猫のように飛び上がり、さっとリビングを越して図書館の入り口まで逃げてしまう。ソファの脇にいる香とすねこすりの視線が絡む。牽制をするように鋭くにらむすねこすりに対して、香の表情は涼し

いものだ。それどころか、逃げるすねこすりの態度が火をつけたらしい。意地悪な笑みを浮かべて、功太を振り向いた。

「あいつ、襲つていいか」

「やめてあげてくれ」

「逃げる背中をみたら襲わざるを得ない」

「外道すぎる。第一、襲つてどうするんだ」

「鍋にする」

「ペットじゃないのか」

すねこすりを助けるために、功太は迅速に紅茶の準備を進めた。

紅茶さえ入れば香も落ち着くだろう。お湯を沸かしながら、功太はすねこすりの怯えようを考えた。自分にはすぐ懐いたのに、香には近づこうともしない。野性の感と結論付けるのはたやすいが、それにしても少し異常なまでの嫌われようだった。

そこまで考えが至って、功太は冬美の話を思い出した。冬美が言うには、妖怪は人間と近くにいるだけで害を受けるらしい。逆もしかりだ。人間も、妖怪と近くにいると悪いことが起こるらしい。その具体例が、先週の「影喰い」事件だ。香がどんな偶然か、影喰いの近くに行ってしまったことがこの発端だった。

「香、あんまりいじめてやるなよ」

となると、香の行為はすねこすりだけではなく、香自身の首を絞めていることになる。双方に損があるなら、止める以外の選択肢はない。積極的に香の阻害をする功太が珍しかったのか、香は目を丸くした。

「功太……」

香がしゅんとする。少し言い方がきつかったかもしれない。あるいは、発言が唐突すぎたかもしれない。そんな風に思い始めた頃、香が顔を上げた。

「功太がグレた……」

「どうしてそうなった」

「あなたをそんな風に育てた覚えはありません」

「ごめん、育てられた記憶もない」

「むう、そうか」

あれこれと言いながらも、さすがに聞き分けは良い。おとなしくすねこすりいじめを諦め、ソファに腰を下ろした。すねこすりもそれを見てほつと胸をなで下ろす。さながら人間のような反応だった。沸騰したお湯を、ティーパックの入った花柄のカップへ注ぐ。水道水を使ったお湯特有の塩素の混じった臭いに、紅茶の香りが混ざる。鼻を突く異臭だったのは最初だけで、徐々にアールグレイの香りが勝っていった。

香は角砂糖を三つ入れる。そのため、少し濃く淹れるのが通例だった。ふつうよりも長めにパックを浸し、薄紅の濁りが見えた頃を見計らってパックを取り出した。

「どうぞ」

香にカップを差し出した。香は「うむ」と言っ受取った。カップから蒸気する葉の香りに、頬を緩ませる。それを見て、功太も満足そうに微笑んだ。香と対面してソファに座る。すねこすりもそれくらいの距離は許容範囲なようで、ソファの背もたれに乗り、功太の肩辺りから顔を覗かせた。

「ずいぶん懐いているな」

「今朝突如現れた謎の未確認生物だけどね」

「いいな。鍋にしたら美味そうだ」

「毒持ちかもよ」

「毒抜きが必要だな」

そう言っすねこすりを見る。すねこすりは毛を逆立てて、功太の頭の後ろに隠れた。功太はひとまず、香にすねこすりに近づかないよう注意を促した。妖怪と人間が近くにいと、互いに良くない影響があること、先日の影響いもそれが原因だと思われることなどを端的に伝えると、香はうなずいた。

「それなら仕方ないな」

それはすねこすりに近づかないことを示唆しているのか、それと

も影喰いに対する言葉なのか、功太には判断つかなかった。追求するつもりもないので、すねこすりについての話はこれで切り上げることにする。

「ところで、さっき泊まるとか言っただけでなかったか？ どういう意味？」

「そのまんまだ」

「説明を一から十までとすると、香のはマイナス四くらい的位置にある」

「むう。まあ大学恒例の入試休みだ。しばらく暇になるから、ここに通おうと思っただが、さすがに毎日行き帰りは面倒だな。ならいつそのこと泊まってしまえば良いと」

「部屋、俺が使っているところ以外埃だらけなんですけど」

「功太の部屋を使えばいいじゃないか」

「布団も着替えも歯ブラシも化粧品もないんですが」

「一緒に寝ればいいじゃないか。着替えと歯ブラシは持ってきてる。化粧品もまあ最低限は」

香はいわゆるナチュラルメイクという奴で、あまり厚い化粧品をしない。化粧をさほど必要としない素材に恵まれているからこそだろう。功太は香の無防備さに言葉を失った。いくら勝手知ったる幼馴染とは言え、年頃の女性が不用意に異性と屋根を、ましては部屋を一緒にするべきではない。布団など言語道断だ。

「いくら何でも無防備すぎるぞ」

「優しくしてね」

「いや、しないから」

「つまり強引に……」

「いや、しないから」

香はくすくすと笑った。上機嫌な様子を見て、功太は参ってしまった。功太もまた若い男だ。この手のからかいの始末はどうも切れ味が鈍くなる。

「布団……無い、よなあ」

この図書館の生活用品は、主に功太が頼んだ物を冬美が買うことで揃えている。逆に言えば功太が頼んでいないものは基本的にこの図書館にはない。いくら探しても、自分以外の布団を依頼した記憶はでてこなかった。

「嫌、だったか？」

突然考え込んだ功太に、香が不安そうに目を伏せた。恐らく演技だろう、そうわかっていても、フォローせずにはいられなかった。

「そんなわけではない。ただ、なんというか、恥ずかしいんだよ」

彼女はいたずらな目を功太に向けた。ああ、またからかわれるのだなと悟る。思わず頬が緩んだ。何となく、暖かい時間だ。

「よし、じゃあ書庫の整理を……」

そこで、言葉が切れた。手伝ってくれ、と言おうとしたのだが、金字の本のことを思い出した。あれも妖怪の一種なら、あまり香に触れさせない方がよいのではないだろうか。さらに妖怪というワードで、すねこすりについても頭をよぎる。香が泊まるとなると、すねこすりもどうにかしなければならぬ。首もとに感じる暖かな感触に、溜息を付いた。

「香、今日は平日だ。よって俺は仕事をしなきゃいけない」

「うむ。時給五十円くらいで手伝うぞ」

「意外と安くてびっくりした。手伝いは良いから、昼飯とか作ってくれないか？ それまでは本でも読んでいてくれ」

香は意外なほど読書好きだった。聞く話では、大学でも読書ばかりしているらしい。功太はそれを心配したが、当の香が気にもとめていない様子なので、考えることをやめた。

「了解した。ご飯は食べられれば何でも良いか？」

「冷蔵庫に入ってる材料で、おおよそ人類が食せるものなら構わないよ。つまり、すねこすりをつつこまなければ」

香は頬を膨らませて、功太を睨んだ。高校の頃、功太が香の話を無視すると、決まってこういう顔をした。

「……むう。今日の功太は、少し意地が悪い」

本は二階の功太の部屋にあると伝えた後、功太はすねこすりと共に地下で作業をこなしていた。共に、という表現は語弊を生む。すねこすりは功太の脛にまとわりついて、邪魔をしているに近かった。それでも香の近くに妖怪をおいて置くのは危険なので、連れて来ざるをなかった。

功太が動く度に、足に小動物を蹴り飛ばすような感触が残る。それを嫌うと結局作業はいつもよりも捗らなかつた。悩んだ結果、功太はすねこすりを持ち上げて肩に乗せた。

棚から本を手に取りろうとする。突然不器用になった感じがして、うっかり本が手から滑り落ちる。乾いた音が共鳴し、地下室を染めあげた。フェードアウトしてゆく落下音に、ふと冷静になる。ここ最近……具体的に言うならば、香が影喰いを連れてきて以降、少々おかしいことが起こりすぎではないだろうか。

今まで妖怪の影すらなかつたのに、突然追いつめられるし、偶然手にとった本は妖怪の一種だし、見慣れない小動物はいるし。一体、自分の周りでなにが起こっているのかと、功太は考えた。

何か良くない空気が漂っている気がした。図書館の冷たい大気は何一つ変わっていないはずなのだが、どうしてか何かか淀んでいる。まるで鏡の中の世界に来てしまったようなちぐはぐさを感じていた。功太は無感動に本を拾い、タイトルを確認する。「何でも辞典五十音順」。こんな本でも、やはり何か曰く付きの物なのだろうか。妖怪関係か、あるいは人が死の関係か。功太の腕に、それが重くのし掛かっていた。図書館にきて以来、初めての感覚だった。

肩で騒ぐすねこすりを横目で見つめた。  
「お前、何者なんだ？」

人の言葉を理解する妖怪は、こんな時ばかり普通の動物に戻ってしまったようだ。小首を傾げるだけで、功太の期待する答えは帰ってこなかった。

香の作った昼食は地味なものであったが、功太にとって酷く美味だった。香の料理の腕前は一般的なものだ。実家暮らし故に、自炊にも慣れていない。それでも普段よりよっぽど美味しく感じたのは、功太が自分の味に慣れきってしまったからだった。何と無く感動を覚えた功太は、夕飯も香に頼むこととなった。

迷ったあげく、すねこすりには地下に居てもらうことで合致した。すねこすりは図書館の寒さなどどうということも無いようで、涼しげな顔をしていた。功太は当面の問題が解決したことに安心し、自室でくつろいでいた。

図書館には本以外の娯楽品はない。となれば、わざわざ肌寒いリビングにいるよりは暖房の利きの良い自室に居た方がよっぽどよい。この図書館の中で、功太の部屋は空気すら犯されない聖地だった。

香は一階で入浴中だった。入る寸前までからかい続けた彼女だが、それもまたしつぽを振る猫のようで、功太は微笑ましく思った。

本をいじったり、ベッドを転がったりして時間を潰しているうちに、扉がノックされた。

「どうぞ」

言うよりも早く扉が開いて、功太は苦笑する。香は黒い長袖の寝間着を着ており、頭から白い蒸気が上っていた。

「出たぞ」

「ああ」

功太は本を仕舞って香を見た。火照って赤く染まった頬や、塗れた髪が艶やかだった。普段は綺麗なストレートの黒髪が水を吸って固まり、乱れる。その普段とのギャップが功太をドキリとさせた。

「本気で、一緒に寝るの？」

香とは幼馴染とはいえず、功太も男だ。こういったシチュエーションに頬を染めないほど、出来た人間ではない。一方で、香の顔はさも当然のことを言っているかのような。何を戸惑っている。私た

ちは家族のようなものだろう。そう、無垢な信頼が功太に向けられていた。

功太は古いものでも良いから布団が無いものかとあれこれ探したのだが、結局見つからず今に至る。その課程であけたこともない二階の扉をいくつも開ける羽目になってしまった。風呂に入る前で良かったと、功太は心底ほっとする事となった。

「ま、いいけどさ」

冷静さを全面に出すように努める。普段ならそんな功太をからかう香も、今回ばかりはそれ以上追いつめることは無かった。

短針が十一を刺した頃、功太たちは布団に入った。シングルベッドといつても、土地だけはある図書館だ。なかなかの大きさがあり、二人で入ってもさほど狭いと感じることはなかった。もちろん、香の身体の細さが一因していることも間違いない。香の小ささを改めて感じた功太は、ふと昔の二人を思いだしていた。

「電気、豆が無いんだけど大丈夫？」

香はむっとしたように功太を睨んだ。

「むう。一体いつの話をしているんだ。もう、暗いのも平気だ」

功太は別に香と眠った記憶は無い。そもそも、幼稚園から高校までずっと同じだったが、二人が積極的に関わり始めたのは中学校の頃からだ。一つの布団に入ったことはおろか、一夜を過ごしたことも数えるほどしかない。それにも関わらず弁解をする香に、功太は微笑んだ。

「はいはい」

蛍光灯から垂らした紐を引いて、明かりを消した。布団に入り直して、瞳を閉じる。瞼の裏に蛍光灯の青い光の名残が走った。

隣に香がいると思うと、上手く寝付けない。自分の寝相はどうだつたろうか。いびきはかいただろうか。普段、一人では気にならないことがやたらと気に付く。結局、功太は香が寝るまでは不寝番をする。と決め込んだ。

「功太？」

眠りを妨げないようにと、慎重な声が掛けられる。

「どうした？」

壁の方を向いていた功太が寝返ろうとすると、香は額をつけてそれを妨害した。振り向いて欲しくないという意味表示を速やかに受け取って、功太は抵抗をやめる。

「手、繋いで良いか」

まるで図書館に入るときの「来たぞ」と同じくらい自然な声色だった。だからこそ、功太は躊躇せずにその手をとることが出来る。功太の右手が香の左手に触れた途端、わずかに香の手が震えた。

「ありがとう」

今度は少し、震えた声だった。壁を向いて居た功太が、仰向けに直る。功太の背中を見ていた香も、合わせて仰向けになった。

「感謝、してるんだ。いつも私の無茶につき合ってくれること。功太のおかげで、中学校も、高校も……大学は、違うけど。ずいぶん楽しくなった」

香は中学校の前半、不登校になった経歴がある。功太も詳しい経緯は知らないが、香の個性に起因しているのだろうと漠然と考えていた。学校に戻ってきた香は、功太と仲良くなり……それからはずっとこんな調子だった。独特の感性を元に無茶をする香と、それに口を出しながらも付き合う功太。周囲からは功太が無理矢理引きずられているように見えたが、二人にとっては理想的な共存関係だった。

「どうした急に。香らしくもない」

感謝されて功太もまんざらではない。照れ隠しに、笑いを含んだ声を作った。

「何となく、今言わなくちゃ一生言えない気がしてな」

「一生、付き合わせる気か」

「嫌か？」

「悪くないな」

香の表情を盗み見ると、そこには穏やかな笑顔が広がっていた。

不意に、功太は香を抱きしめなくなった。でも、それは行きすぎた行動なのだろうと、自分を咎める。二人の関係は、こうでいいつながった手がそれを物語っている。その手のか細いつながりを、大事に、大事にしていこうと、功太はそう思った。

香が目を瞑ったので、功太もそれを真似る。夜が更けてゆくのだ。胸に露が染み入るように、そう感じた。

「天狐と天子（テンゴ）と（前編）」

香は子供の頃から朝に弱い。いつもより早く起きた朝は、決まって頭がはつきりせず、千鳥足になる。今日もまた、例外ではなかった。

香が目を覚ましたとき、功太は既に部屋にいなかった。重い瞼を擦って時計を見ると、振り子時計は六時半を指していた。普段功太が起きる時間よりも、一時間以上早い。香もそれを知っていたので、首をかしげた。不思議に思いながらも、部屋を出る。どこからともなく冷たい風が漂ってきて、身震いをした。欠伸をした息さえも凍えてしまいそうなほどだ。何度図書館に来ても、これだけは慣れることができないと、香ははつきりしない頭で思った。

リビングに降りると、功太が朝食を準備しているところだった。タイマーで功太が起きる一時間前に暖房がセットしてあったようで、廊下に比べるとやや暖かい。見ると、ハムエッグを二人分に、トーストを一枚。香がまだ起きてこないと踏んで、トーストは自分の分しか用意していないようだった。

「おはよう」  
キッチンに入り、声を掛けると、功太は驚いて振り向いた。自分の生活音が香を起こしてしまったのかと勘ぐり、申し訳なさそうにする。

「おはよう。悪いね、起こした？」  
「いや……ふわあ」

香は半分眠っているようなものだった。常に船を漕いでいるし、語調も普段よりゆったりとしている。そんな様子を微笑ましく思いながら、功太はトーストを皿に移し、食パンをトースターに入れた。「そのこのトーストは香が食べていいよ。今、ハムエッグ出すからさ。ソファにでもいてくれ」

人は反抗する意志が無いときは、命令に従うようにできている。

睡眠状態の香はほとんど功太の言葉を理解できなかったが、頷くとおぼつかない足取りでリビングへ戻っていった。功太は繋がってしまつた二つのハムエッグを、菜箸で丁寧に丁寧に切り分ける。フライパンとの接地面が軽く焦げ付いてしまい、上手く分離できない。功太は力任せに焦げを削り取つた。

分けたハムエッグの一つを皿に乗せ、リビングへ運んだ。香は黒いソファの上で、同じくらい黒い寝間着を着てうつらうつらとしていた。音を立てないように、慎重に皿を差し出す。

「ん……ありがとう……？」

「なんで疑問系なんだ」

香は焼き目の程良くついたトーストを手取る。もうすっかり冷めてしまつていたが、証明の明かりを表面のマーガリンが反射し、輝いて見えた。香が小動物のように小さく口を開けて噛みつくことほつれるような小気味の良い音がした。触感は程良く。冷めたことが幸いして、熱がその味を邪魔してしまうこともない。沈んだ生地は染み込んだマーガリンを吐き出し、香の唇を濡らした。そのまま噛みきると、甘い香りが口の中に広がる。……しかし、香はその味を楽しめるほど、覚醒してはいなかった。

「寝てくれば？」

功太が呆れて提案すると、香は首を横に振りながら「うん、ありがとう？」と言つた。香は、自分以外の人間が活動しているときに寝ることを嫌つた。諦めた功太は香の頭を一撫でするとキッチンに戻つた。

トーストを焼く間に、平行してお湯を沸かす。朝食をとつて糖分が身体に回れば、香も目を覚ますだろうと功太は推察した。意識がはっきりすれば、当然紅茶をねだるはずだつた。

功太の予想は当たつており、トーストの半分を口に含んだ後、香はようやくまどろみから覚めた。それを確認して、功太は紅茶を差し出す。ハムエッグと紅茶。悪い組み合わせではない。香は功太を

見上げた。

「うむ。ありがとう」

先ほどまでと比べて、随分すっかりした口調だった。香は艶のある唇をカップに近づけた。勢いのある吐息が、紅い水面を揺らした。そして、慎重に、花柄のカップに口付けをする。その瞬間だけ、瞳を閉じた。熱を和らげるために音を立てて紅茶をすすると、功太の鼻にも甘い香りが漂ってくるかのようだった。

「……うむ」

いつも通り、香はそれだけ呟いて満足そうにカップを置いた。

しばらくの間、ハムエッグをつついたり、トーストをかじったりしていた香が、ふいに功太をみた。

「そうだ。今日はなんでこんなに早いんだ？ まだ七時にもなっていないのに」

「管理人の、香坂冬美さんって方が今日いらっしやるんだ」

このとき初めて、功太は香と冬美に面識が無いことに気が付いた。二人は良く図書館にくるが、どういう偶然か、この二ヶ月会うことはなかった。

「管理人……そうか。つまり、私の一声で功太の首が……」

「割と本気で勘弁してください」

「土下座程度で許してやるとでも？」

「許されなきゃいけないようなことをした記憶はない」

「あ、あの夜のことを忘れたのね！」

香が自分の身体を抱くようにして功太を睨んだ。含み笑いが隠せずにいることを、功太はもちろん気づいていた。

「昨日からずいぶんその手のネタ引っ張るなあ」

「しばらくはこっちの方向で攻めようかと思って」

「いいから、朝食早く済ませて。多分、香坂さんは七時に来るだろうから」

古い振り子時計を見ると、もう十分も無かった。香もそれに気づいて、急いでハムエッグを片づける。

「全く。来客があるなら先に言ってくれ……」

香は食べ終わるとすぐに洗面台へと走った。香は別に、すっぴんのまま他人の前に出ることに抵抗はない。功太の前でさえ、現れることがある。しかし、さすがに顔も洗わずに人と会うことは嫌うようだった。香にも焦ることがあるのだと、功太は感心してしまった。もともと、香がわざわざ冬美の前に出る必要性は全くなく、冬美がいる間は部屋に戻っていれば良いことに功太は気づいていたので、複雑な気持ちであった。

当の香はというと、顔を洗うと、すさまじい勢いでリビングを駆け抜け、二階へと駆けていった。騒がしい音に功太が天井を見てみると、三分もせずにその音がまたリビングへと帰ってきた。何をしているのかと疑問に思った功太だったが、それは香の姿を見えずぐに解決された。

香は黒いワンピースの上に、同じ黒の長袖のパーカーを羽織っていた。寒々しい姿に、功太は顔をしかめる。

「寒くないか？ その格好」

「ヒートテックき……」

全力で階段を上り下りした香の息は酷く乱れていた。その息が白く濁る様が、空気の冷たさを良く表していた。

「着、てる」

乱れる息を整えながら、無理矢理に声を出す。功太は香の頭を撫でると、ソファに座らせた。それと同時に、呼び鈴がなり、澄んだ音が空を裂いた。

「ぎりぎりだ」

功太が香に笑い掛けると、香は照れたように頬を膨らませた。

「じゃあ、彼女が件の新藤香ちゃんなんだ」

冬美は図書館に入ってくるなり、めざとく香を見つけた。数秒間玄関口で固まった後、冬美は功太の表情を確認した。そこから何を

読みとつたのか、冬美は図書館にいる女の子を、新藤香だと断定したのだった。

「件の、つてなんですか……」

功太は不思議に思う。冬美と香の面識は無かったはずだし、功太は香について話したことはなかった。もちろん、香の名前も。

冬美はそんな功太の様子を気にしていないかのように、香に近づいていった。香もそれに気づき、立ち上がる。

「新藤香ちゃんね。私は香坂冬美。この図書館の管理人で、荻原君の雇い主にあたるわ。よろしくね」

冬美はさすがに大人だった。身振り手振りに加えて、自然な笑顔を浮かべることで香に警戒心を抱かせないようにしていた。香も、ほとんど本能的に、冬美が良い人だと判断して、力んでいた肩が降りる。

「新藤香だ。よろしく頼む」

功太はぎょつとしたが、冬美はタメ口も笑って流した。冬美が手を差し出すと、香もそれに答える。

「香ちゃん、良く図書館に来ているのでしょうか？ 寒いわよね、ここ」

「ああ、まったくだ。功太の神経を疑う」

「ちゃんとした暖房設備を整えていない私の責任なのだけどね。でも、確かに荻原君は寒さに強いわよね」

自分の責任だと認めつつも、話を功太に移すことで、直前の香の台詞を殺していない。かといって、功太を貶めた訳でもない。冬美の風に靡く藤のような柔軟な仕草に、功太は感服せざるを得なかった。

女性同士だからか、あるいは香の口調が幸いしたのか、二人はあつと言つ間に打ち解けた。功太が紅茶を淹れている間にも、二人の笑い声はリビングにキッチンに響いていた。それはとても楽しいなもの、紅茶をリビングに運ぶことを功太に躊躇させた。香は独特

の感性の持ち主である上に積極的にコミュニケーションをとろうとしない。香にとって冬美は、数少ない気の合う女友達でもあった。

「それで、私は何がそんなに面白いんだ？ と彼らに訊いたのだが……それがどうにも気に食わなかったらしくてな。気まずそうに目を刺らされてしまった」

「なるほどねえ……。確かに、変な話ね。もちろんその男の子たちの気持ちもわからなくはないけど、私は香ちゃんの方に考えが近いわ」

冬美の言葉が社交辞令であれなんであれ、自分を理解される感覚は、香にはとても甘美なものだった。香にとって功太は、言葉を飲み込んでしまうブラックホールのようなものだった。どんな奇抜な言葉も、特異な感性も、功太を通すとなぜかそれが「可笑しいものではない」と感じられてしまう。功太の返す言葉には、例えばそれが否定であつても、そんな、不思議な魔力があつた。

それに比べると、冬美はもつと柔らかい。香が次の言葉を紡ぎやすいように、優しく投げ返してくれる。母と子のような、暖かな上下関係がそこにあつた。

功太がリビングに入ると、二人の視線が功太に集まつた。そのいたずらな笑みから、功太の話をしていただけだと悟つた。

「紅茶、入りましたよ」

功太にとって、紅茶は、一つの話を超す材料になりつつあつた。

紅茶を二人に出した功太は、二人に言及されるよりも早く、冬美に話しかけた。

「香坂さん、今日はどういった用事で？」

冬美は名残惜しそうに香に笑い掛けたあと、普段の管理人の顔に戻つた。

「ちよつと、荻原君に話があつてね」

冬美が功太に目で合図をする。功太はそれを上手に受け取つた。

「せっかくの天気ですし、外で話しましょうか」

どんなに良い天気、気温だとしても、功太が進んで外出するとは香には考えにくかった。香は、自分がいてはならない話なのだと悟る。紅茶を少量口に含み、舌に溶かしてから、二人に向けて言った。「私は本でも読んでいる。紅茶もあるしな」

功太は地下室には近づかないようにと再三の注意を促す。そして、そのときになってようやくすねこすりの存在を思い出した。それも、冬美に訊かなくてはなるまい。

愛惜するように一言二言声を掛ける香をいなしながら、二人は図書館を出た。

外は日差しが鋭く、図書館の中よりもよっぽど暖かかった。しかしひとたび日陰に入れば、やはり空気の冷たさは歯をならすほどだった。功太と冬美がいかに寒さに強いとは言え、好んで通りたい道ではない。二人は日向を縫うようにして、庭を歩きだした。

「来る度に思うけれど、酷い庭ね」

庭は相変わらず、背丈の低い雑草が伸びていた。霜に塗れて薄くなった緑色が無人の哀愁を漂わせる。

「手をつけようとは希に思うんですけど。いかんせん広くて」と、そういうと、冬美は乾いた笑いを漏らした。

「真面目ねえ。庭掃除には給料でないのに」

「その分、書庫の整理がスローペースですからね」

給与査定者に対して言う言葉ではないなと功太は苦笑する。それでも、冬美になら問題無いだろうと、功太はそう思った。それがそのまま、功太の冬美に対する評価だった。

「ええと、そういえばですね。先日、すねこすりと思われる動物が図書館にいたのですが……」

何か知っていますか、と繋げるよりも早く、功太は冬美が認知していることを確信した。その質問をまっていた、というような喜びが、かすかに冬美の目に灯ったからだ。

「すねこすりとは、最近ご無沙汰だなあ。久々に挨拶しようかしら」  
「……何者なんですか？ すねこすりって」

「妖怪よ。それは知っているか。あの図書館に住み着いているの。心を許した相手には姿を現すそうよ」

妖怪には不可視と可視の二種類がいる。影喰いのような姿は見えないが確かに存在しているものを不可視妖怪と呼び、金字の本や、日本に伝えられる数種の鬼などが可視妖怪である。すねこすりや追い犬はその中間に位置し、可視、不可視状態を自由に行き来できた。「へえ……」

どういう経緯かは知らないが、功太はすねこすりに気に入られたようだった。それは先日の様子を見れば一目瞭然なのだが、それでも功太は不思議に思わずにはいらなかった。

「どうして、気に入られたんでしょうか。特別なことはしていないはずなんです……」

冬美は複雑な顔を作る。それは苦い、というよりは、純粹にどう説明したものかと迷っているようだった。功太もそれを察し、追求せずに待った。

一陣の風が二人の間を抜けた。風は図書館の壁にぶつかって、その壁に勝てないことを知り、逆らわずにそこに沿って進む。そんな北風の様子を肌で感じながら、功太は冬美に視線を移した。悩ましげな様子の奥底に、憂いの色が見える。日曜日、図書館の奥地から帰ってきたときと、同じ瞳の色だった。

「すねこすり、香ちゃんには懐かなかったでしょう？」

「え？ ええ、まあ」

冬美が独り言のように呟くので、功太は最初、自分に向けた言葉だとは思えなかった。語尾があがったのを聞いて、しどろもどろに答える。

冬美は立ち止まって、功太を正面に据えた。

「それが一つの才能なのよ。あなたは妖怪に耐性があるんだ、と言ったの、覚えてる？」

「ええ、まあ。じゃあ香には耐性がないから、懐かないんですか？」  
「そうじゃない。耐性があっても、懐かない人には懐かないものよ」  
同じ条件でも、動物に好かれる人、好かれない人がいることは功太にも実感できる。ただ、それを「才能」と呼ぶのは少し違う気がした。

怪訝そうな功太に、冬美は照れたように頬を掻いた。

「うん、やっぱり私は説明が下手みたいね」

「いえ、そんなことは」

功太が取り繕うとしたとき、冬美は手を功太の前に出してそれを留めた。打って変わって、真剣な表情だった。

「来なさい、追い犬」

冬美がそう言うと、あたりにまた、風が吹いた。しかし不思議なのは、その風の冷たくないことだった。夏の夕暮れにあるような、生暖かい、人肌のような薫風。その空気に鼻を突く血と肉の生々しい臭いが混ざっているのに気づき、功太はかつての出会いを思い出した。

いつ、どのように現れたのか、いつの間にかそこには追い犬がいた。異様に長い手足で地面を押し、茶色の毛を靡かせている。鋭い瞳には野生が感じられ、見る者を脅かした。

「貴様とは以前一度会ったはずだ。影の者や金字と相見、今更私に驚くこともあるまい」

追い犬の重い声が功太を驚愕させたわけではなかった。なにより功太を硬直させたのは、冬美が追い犬を呼んだという点だった。彼女が妖怪について詳しいことはかねがね知っていたが、それでも、妖怪を自由に呼べるような存在であるとは露にも思わなかったのだ。  
「香坂さん、これは……？」

冬美の様子は相変わらずだった。困ったような、照れたような様子で、人差し指で頬を掻いている。

「私が言った才能というのは、妖怪と共存しうる存在である、ということなの。私のようにね。荻原君にも、その才能がある」

「追い犬が冬美を睨んだ。その意味を、功太が知ることはない。  
「え、つと」

冬美の「功太にもその才がある」という物言いは、酷く功太を困惑させた。功太は他人よりも多少成績は良かったし、多少運動も出来たが、それでも才能があると言われたことはない。その手の言葉は、功太をほかのどんな言葉よりも強く刺した。

「詳しくはまた説明するけれど、妖怪に協力することを、考えておいて欲しい。妖怪は人間の協力無くては暮らしていけない存在。あなたの力が必要なのだ」

「俺の、力？ 俺、普通の人間ですよ。別に口から電撃がでたりもしませんし、猫型でも青色でもありません」

「彼女が言っているのはそういう意味ではない」

追い犬が口を開いた。単純に説明を引き継いだけなのだが、追い犬が言うとその功太を責めているように聞こえた。

「我々は人の傍には寄れぬ。人とは違う場所に、住処テングが必要なのだ。その住処を守るのが、天子となった人間の役目」

妖怪も、人間と同じだ。生きるためには土地がいる。人間ほど食が必要ではないが、人間の近くには生きられないという性質上、土地の大切さは人間よりも遥かに上だった。その土地を守るのが、功太のように妖怪への耐性を持つ人間だった。その人間のことを、妖怪の世界では天子と呼ぶ。

「天子？」

「妖怪の協力者の総称って考えれば分かりやすいかしらね。語弊はあるけれど」

天命を受けた子だから天子と呼ぶのだと、冬美は説明した。

「荻原功太。貴様にはその才がある。天命を受けたのだ」

追い立てるような言葉を追い犬がかけた。功太は二人の遠回しな言葉に混乱していた。結局、自分は何をすればいいのか、さっぱり見えてこなかった。それを悟ったかのように、冬美が肩に手を乗せた。

「別に、今すぐ何をしろということではないの。そうね……今まで図書館の住み込みバイトだったのが、正社員になる。こんな感じの考え方でどうかしら。私たちの協力者……つまり、天子になったからといって、すぐに何かあなたにしてもらおうってことはないわ」  
そこで、一同の会話は途切れた。功太はまだ二人の言葉を咀嚼しきれていなかったし、冬美もまた、これ以上どういった説明をなすべきか判断しかねていた。それを、話の終わり判断したのか、追いついた犬はまた魔法のように姿を消してしまった。追いついた犬がいなくなったのを見て、冬美が大きく息を吐いた。

「あとで、天子に関する本を渡すわ。多分、荻原君の場合は文章で読んだ方が理解が早いと思うの。今は、香ちゃんのところへ戻りましょう」

功太もひとまずそれに同意し、再び日向を通って、玄関口へと向かった。

玄関を開けた功太は、違和感を覚えた。出てきたときとは異なる、何か不気味な静寂を感じ取ったのだ。その原因はすぐにわかる。あの騒がしい香がリビングにいなかったのだ。香の居なくなった図書館は、普段よりもよっぽど黒々しく見えた。暗く、人気の無い、とても寂しい場所だと、功太は初めて思った。

歩きながら香の言葉を思い出し、部屋へ小説を取りに行っているのかと、功太は考えた。ちょうどそのとき、ソファの足もとに、黒い塊が転がっているのを見る。功太の心臓が跳ねた。見覚えがあったのだ。その、黒い、布に。漆黒と称するに相違ないパーカー。それと同じ色をした、ワンピース。それが何を意味するのか、功太の頭が汲み取った瞬間、功太は走ってソファのもとに駆け寄った。

香が、倒れていた。苦しげに胸を上下させ、小さく呻き、少しでも苦痛を和らげようと、フローリングに爪を立てていた。

「香！」

その顔は赤く、焼けるように熱い。目はどこか空をさまよい、功太の姿すら認識できないようであった。

功太は混乱しながら香の手を取った。その様は、昨晚の優しげなものから一転して、乱暴なものだった。どうしてこんなことに。その頭の中で問うても、答えは見えなかった。香の身体の細さが、今だけは不吉な影をもって功太の心を侵していった。香が呻いた。功太は目の前が真っ暗になるのを感じ、この後に及んでようやく、自分にとっての香が何者だったかを知る。だが、その香は、風前の灯火だった。

そんな二人の様子を後方から眺め、冬美は密かに笑っていた。その狡猾な顔の歪みに、功太が気づくことはなかった。

「天狐と天子（テンゴ）と（後編）」

功太は静かに香をソファに運んだ。香の様子は相変わらずで、打ち上げられた魚のように空気を求めて喘いでいた。それを見て、功太は静かに冷静さを失う。自分の怒りや悲しみを表に出すことを、彼はあまりしない。今回も同じで、心の奥底で動揺し、焦燥していても、第三者からみるといやに冷静に見えた。内心に渦巻く不安を、冬美でさえ見抜けない。冬美は功太の落ち着きようを見て、安心してと同時に驚愕した。

冷却シートでも貼れば苦痛が和らぐだろうか。そう考え、功太はキッチンにある冷蔵庫の方へ体の向きを変えたとき、目の端に、テーブルの上の二冊の本が映った。一冊は見覚えのブックカバーをしていて、功太の実家の近くにある本屋のもので、彼が持ってきたものだった。もう一つも見たことはあるものの、そこにあつてはならないものだった。功太が息を飲み、硬直する。固まっている功太をみて、冬美はテーブルの上にゆっくりと視線を移して、そこにある赤い本を認めた。金色の筋が無尽蔵に彫り込まれており、それは文字とも、図系とも言えない形を模している。冬美が、それを丁寧に持ち上げた。

「禁字の本、ね」

本を開き、中を確認する。何も書かれていないはずのそこには、大量の文字がぎっしりと詰まっていた。それは攻撃的な蟻の集団を思わせて、見る者をぞっとさせる様だった。功太が本を覗き込み、自分の名前が文章中に何度も出てくるのを見、そして、気づく。この本は、香の一人称で、その半生射が語られているのだった。

「これって……」

香の過去だった。功太と出会い、そのとき考えたこと、思ったこと、感じたことが詳細に綴られている。香自身でしか知り得ないほど、細かく。功太はほとんど反射的に本を冬美の手から叩き落とし

た。読んではいけない。そう思ったのだ。香の過去は香だけのものであり、いかに自分であろうとも覗き見ることなど許されない。「香ちゃんの過去が書いてあったのかしら？ ……だとしたら、結構危ない状況ね」

冬美は冷静に落ちた本拾い上げて、テーブルの上に置いた。

「書いて、ありました。どう危ないんですか」

冬美が答えようとした瞬間、香が一際大きく唸った。功太はそれを見て走りだし、乱暴に冷蔵庫を開けて冷却シートを取ってきた。少しでも香の苦痛を和らげたいと思つての行動だったが、冬美はそれを冷やかな目で見た。

「無駄だと思うわ。禁字の本に触れたのだと仮定すると、そんなものじゃ気休めにもならない」

功太が珍しく感情を露にして、冬美を睨んだ。縋るような、怒るような複雑な表情だった。

「じゃあ、どうすればいいんですか」

顔に反して声は実に落ち着いていた。穏やかに二十年を過ごしてきた功太は、もう怒り方も忘れてしまったのかもしれない。そんなことを考えさせるほど不揃いな声色だった。

「妖怪のことは、妖怪に訊くのが一番だと思うわ。どちらにせよ、私には応急処置ぐらいしかできないしね」

「応急処置は、できるんですか」

功太が目を剥いた。そこに微かな希望を見いだせたのだ。取り敢えずは、香の苦痛を和らげられればそれが一番だった。

「出来るけど、そんなことをやっている暇があるなら禁字に詳しい妖怪……天狗のところへ急ぐべきね。ついてきなさい」

冬美の言い方にはどこか逆らえない、高貴なものが含まれていた。その昔、人型の神はその身分を明かさずとも、口先だけで相手を服従させられたという。冬美のそれはちょうどそう言った具合で、功太は憤怒も焦燥も引つ込み、不思議と反論する気も起きなかった。

冬美は功太の沈黙を肯定と取り、玄関へと歩きだした。功太も、

それに無言で従った。

功太が次に口を開いたのは、庭を門に向けて歩いていくときだった。

「どこに向かっているんですか？」

早足で前を歩く冬美は、功太を振り返りもしなかった。いつもと違う様子に少し気後れしてしまう。

「追い犬を呼べるところまで。天狗の元に行くなら、追い犬に乗ったほうが早いわ」

「乗るんですか？ 追い犬に？」

功太が驚愕して声を上げるが、冬美はどこまでも落ち着いていた。歩みを一切緩めず、平然と答える。

「ええ。追い犬なら一瞬だからね。彼がどんな術を使っているのかは、私も知らないけれど……」

「香坂さんは、追い犬を呼べますよね。天子、なんですか？」

「違うわ。……私のことは、また今度にしましょう。今は、香ちゃん先決。そうでしょう？」

功太は少し悩んでから、それでも力強く返事をした。

「はい」

そこで図書館を出て、初めて冬美が振り向いた。満足そうな笑みを漏らしながら、手を挙げる。

「ここら辺なら、もう大丈夫でしょう」

言つが早いか、気がついた時には追い犬はもう現れていた。その歪な容姿も、今の功太には頼もしく見えた。

「追い犬。荻原君を天狗のもとに」

追い犬は、庭で話した時と同じように冬美を睨んだ。追い犬は冬美の言うことを素直にきくにも関わらず、敵対心を隠そうともしない。嫌悪すら垣間見られる表情に、功太は狼狽する。

それでも、やはり冬美の言葉には逆らわない。追い犬は功太に背中に乗るよう催促した。

「……え？ 俺が乗るんですか？ 冬美さんじゃなくて」

「香ちゃんの処置ができるのはこの中で私だけでしょう？ あなたが行って、私が残った方が効率的だと思うわ」

功太は図書館を見た。香を覆うその建物の大きさに、息を呑んだ。しかし、意を決したように、冬美を振り返る。基本的に受動的な功太が、珍しく強い口調で言った。

「天狗さん？ のところに行けば良いんですよね。連れてってください」

冬美はそれを見て満足そうに笑った。気に食わなそうに追い犬が鼻を鳴らす。

「天狗は、貴様が思っているほど人間に友好的な妖怪ではないぞ」

「それでも、香を助ける手立てが他にないなら、行きます」

追い犬は功太に背を向けた。早く乗れという合図だと、功太は悟る。

「香ちゃんの方は任せなさい。絶対に有事が無いとは言い切れないけれど、可能な限りはやってみるわ」

功太は神妙な顔で頷く。ゆっくりと追い犬に近づくと、恐る恐るその背を跨いだ。

「バランスは崩さぬよう、気をつける」

そう追い犬が言った途端、功太の世界は一転する。追い犬の周りに風が集まりだした。風が紫の色を纏い始める。それはまるで薄絹のように功太と追い犬にまとわりつき、そして次の瞬間、追い犬が地面を蹴ったと思うと、一人と一匹は凄まじい速度で地を駆けていた。追い犬の足の動きと、速度がどうにも一致しない。さらに不思議なことに、これほどの速さにも関わらず、功太は空気の抵抗を全く感じなかった。もはや原型すら留めていない景色を脇に見る。脚に筋肉の動く力強い脈動が感じられなければ、功太は自分が走っていることさえ忘れてしまいそうだった。

功太の旅はわずか一分とかららずに終わる。紫の風が散会したと思っただら、いつの間にか、動く景色は止まっていた。

「すごい……」

思わず声を漏らしてしまう。それに対し、追い犬は遠い目をして答えた。

「これが、妖怪の世界だ。荻原功太」

功太らの目の前には防空壕のようなものがあった。入り口は非常に広く、巨大な穴のようにも見えた。闇は深く、中を覗き込んでも一向にその先を見通すことができない。

「ここに、天狗が住んでいる。……住んでいる、というよりは守っていると言った方が正しいな。本来天狗は、森の深くを好むものだ」  
「天狗ってやつぱりあれですか。鼻が長くて赤くて」

「それは人間の空想だ。顔は鷹が一番近いだろう。剣の扱いに関しては一級品だ。天狐に剣を教えたほどだ」

「鷹、ですか。天狐というのは？」

「天狐は」

ハツとしたように、追い犬が穴へと視線を向けた。功太もそれに従うと、闇の奥から、地を搔く音が聞こえた。その音はやがて輪郭をなし、闇は一体の妖怪へと変容した。

鷹のような顔に、鋭い瞳。背には鴉を思わせる黒翼があり、手や足には肉食動物のような爪を有していた。全身が刃物のような鱗に覆われている。その姿の全てが攻撃的で、功太はたじろいだ。天狗には、存在するだけで辺りの闇を裂いてしまうような気迫があった。  
「なんの用だ、追い犬」

容姿に反して、すつとした透明感のある男の声だった。高めの声にも関わらず、殴りつけるような声の重さがあるのを、功太はひしひしと感じていた。

追い犬は黙って功太を顎で指した。天狗が、切れ味の良い瞳で功太を見る。数瞬の沈黙。功太は天狗が自分から口を開かないことに痺れを切らし、声をあげた。

「あの、天狗さん、ですよね。俺の友達が、金字の本に触れたんで

す。それで、香坂冬美さんが、天狗を尋ねるとおっしやって……」

「簡潔に言え、人間」

天狗が功太をびしゃりと遮った。天狗本人に自覚があったかはわからないが、相手を威圧する声色だった。

「……俺の友達を、助けてください」

功太は恐る恐る言った。天狗は真つ黒な翼を開き、笑った。

「舐められたものだ。我に人間の手助けをしると？」

「その者は天子たるものだ。それがわからない天狗ではないだろう」  
追い犬がすかさずフォローを入れたが、天狗はそれを鼻であしらった。

「契約を済ますまでは、所詮は人だ」

「契約？」

天狗は怪訝そうな顔をした。功太の無知さに呆れているというよりは、不思議がっているように見えた。

「天狐はそんなことも教えなかったのか？ 天子は、才能のある人間がここ、黄泉平坂で契約を済ますことで生まれる。我々妖怪の掟となる書物にも、そう書かれている」

結局、天狐とは誰だろうかと功太は漠然と考えたが、今大事なのはそこではなかった。

「俺が天子になれば、香を助けてくれるんですか」

「天子は妖怪の協力者であり、天狐と並び妖怪の中でも最高位の位を得る。天子の命令であれば、我とて従わねばならない」

より高位の妖怪の命令に従わなくてはならないという決まりはない。もちろん下位のものよりは発言力があるのは確かだが、強制力は無かった。

それにも関わらず、こういった発言を天狗がするのは、荻原功太を天子にしようという意思に他ならなかった。

「なら、天子になります。……どういふ役目があるのか、まだ全くわかりませんが」

天狗は長い間口を閉ざしていた。天子の仕事を今ここで説明すべ

きか否かを迷つてのことだった。

「ついてこい、人間」

天狗は黄泉平坂へと引き返してゆく。功太は追い犬の様子を確認した。追い犬が頷き、行つてこいと言つたので、力強く頷き返した。功太は確かな足取りで、黄泉平坂へと向かう。

黄泉平坂というのは、古事記によればこの世とあの世……つまり現世と黄泉を繋ぐ坂だという。功太もそれを知っていたから、不安が無かつた訳ではない。天子というものを功太はまだ理解できず、とにかくわからないこと尽くしだった。それでも追い犬に従い、天狗の後を追つたのは、ひとえに香のためだった。香の苦しい表情が臉の裏にちらつく。功太は最悪の想像を、頭から追い出した。きつと、冬美がなんとかしてくれているだろう、自分がすべきことは、天狗の協力を結び付けることだ。そう自分に言い聞かせた。

黄泉平坂の内部は意外にも、天然の石で出来ていた。鍾乳洞のようにしつかりとした足場がある。緩やかに下降してゆく坂は、どこか青みを帯びた光を放っていた。故に、真つ暗なはずの坂でも功太の目は良く利いた。

「どこまで行くんですか？」

「最奥まで」

「……大丈夫なんですか？」

唐突な言葉に天狗は怪訝な顔をするが、すぐに合点がゆく。

「ここは古事記の伝承にある黄泉比良坂とは違う。いわば、出来損ないのような場所だ」

「出来損ない、ですか」

「そうだ。出来損ないであるここを、我々が天子との契約場所として利用している。……あるいは、初めからそういう場所として作ったのかもしれない。我には、知る由もないことだ」

黄泉平坂。現世と黄泉を繋ぐ坂。そんな途方もない道さえも、誰かが作つたのだろうか、功太は考えた。人か、妖怪か、それとも

それ以外の何者か。答えは出るはずも無く、疑問は長い石の坂に木霊して消えた。

「出来損ない、ということとは、本物の黄泉比良坂もどこかにあるんですか」

天狗は一度啞然とし、そのあと小気味よく笑った。

「貴様が天子になるとは全く信じられんな。黄泉比良坂は、貴様が住んでいるすぐ近くにあるじゃないか」

「すぐ、近く？」

天狗からの答えは、なかった。

坂は奥に進めば進むほど明るさを増していった。どれくらい歩いたか功太には実感が無かったが、坂はもうすっかり青白い光に包まれて、壁の突起や影すらも良く見えるほどだった。

「天子の仕事って、何があるんですか」

冬美も追い犬も、この質問をすると言い淀んだ。そしてそれは天狗も同じで、答えることはなかった。不穏な空気を感じた功太は、それ以上言及することができなかった。天狗もまた、自分から積極的に語ろうとはしなかった。

さらに歩くと、功太の前に平坦な広場が見えてきた。青い光が更に強く、眩しいほどだった。円形の広場の壁にはクリスタルのような半透明の石が敷き詰められており、それらが光を発しているようだった。地は先ほどまでとは違い、アスファルトで舗装された道路のように端正に整っている。その一番奥に祭壇があり、日本刀のようなものが捧げられていた。

「さあ、人間よ。祭壇に奉られた蜘蛛切クモギリの刀を取れ。それが、天子になった証となる」

天狗が慎重に言う。場の神聖さが天狗の言葉にも宿り、それは啓示のように功太を射抜いた。

功太は丁寧に歩き出す。地面を踏む度に、体中に形容しがたい興

奮が入り込んできた。全身の毛が逆立ち、背中がぞくぞくとした感覚に包まれる。最初は純粋な興奮だったそれは、しかし徐々に恐怖へと移行した。一步、歩みを進めることに、足取りが重くなる。祭壇の前にたつたとき、その恐怖の感情が刀から発せられていることに、功太は気づいた。

天狗の言った通り、功太は蜘蛛切を取ろうとする。しかし手が近づくほど心を侵す恐怖が大きくなり、直前で功太の手はついに動かなくなった。刀を取ろう、そう功太は思っているのに、身体がついてゆかない。本能的に身体がそれを拒絶しているかのようだった。

その様子を見た天狗が、静かに口を開く。

「蜘蛛切は、最初の天子たる者が妖怪・大蜘蛛を切り捨てた刀。多くの妖怪と、多くの人間の血にまみれたその呪われた刀は、人間も妖怪さえも扱うことができない。ただ、天子その者以外は」

「妖怪と、人間の血……」

功太の不吉な想像が形をなして、頭の中に流れ込んできた。男が、その手の刀で巨大な蜘蛛を殺す映像。その映像は引きちぎられた紙のように乱暴に止められ、また別の場面に切り替わった。先程と同じ男が、人間を、切り殺していた。男は涙すら枯れ、死んだような目をしていた。吐き気を催す映像に、功太は眩暈を覚えた。

「天子は、人を、殺すんですか」

「妖怪との共存関係を脅かす者であれば、人間であれ、妖怪であれ排除するのが天子、そして天狐の役割だ。お前ら人間と我らは、そうして微妙なバランスを守ってきたのだ」

明治以前、妖怪の存在を知る人間は多く、闇に生きる妖怪を疎む者は多かった。同時に、そんな人間を嫌う妖怪もまた多かった。その仲裁を図るのが天子と天狐であり、彼らは双方の種族から恐れられたと、天狗は語る。

「尤も、最近では人を殺すも妖怪も殺すも随分少なくなった。妖怪を知る人間が少なくなったからだ。我々も、人間らと争わずに済むのならそれに越したことはない」

人とも、妖怪ともつかない相容れぬ存在。功太は、蜘蛛切から目を離すことができなかった。今離してしまえば、刀が功太を取り込んでしまうのではないかと思わせるほどの、禍々しさがあった。

「荻原功太。お前は同族たる人間、そして妖怪を切る覚悟があるか。その覚悟をしてまでも、天子になりたいと望むか」

功太の頭に、香の顔がよぎった。全身黒尽くめの奇妙な服に、こんな時にも関わらず苦笑いを漏らした。次に、ソファの上でもがき苦しむ姿が浮かんだ。助けたい、と思った途端、金縛りにかかっていた腕が、軽くなる。

功太は意を決して、蜘蛛切を手を取った。祭壇から切り離された蜘蛛切はそのおぞましい覇気を収め、功太の手にすっぽりとはまった。

「……歓迎しよう、新たな天子。お前は今、正式に図書館の天子となった」

功太は額からどつと汗が流れるのを感じた。腰が抜けたようにその場に倒れ込む。青い光が、暖かく功太を包み込んだ。

冬美は禁字の本を開き、その中身をつまらなそうに眺めていた。ソファに横たわる香の姿は穏やかなものだ。冬美の応急処置が効果を示したのは明白だった。

それでも、香が危険な状況におかれていることには変わらない。苦しみがなくなっただけで、その命が脅かされている現状は何一つ変わらないのだ。

冬美には、功太は天子となるという強い確信があった。功太が香を見捨てるはずがないと考えていたからだ。それでも、万が一ということもあるだろうと、冬美の内心は穏やかではなかった。それが一パーセントに満たない可能性でも、直接その目で確認するまでは安心できなかった。

そんなとき、図書館の扉が開いた。冬美はあわてて禁字の本を閉じる。入ってきた人物は、当然、冬美も良く知る人物だった。

「お帰りなさい、荻原君」

その手に持った蜘蛛切を見て、冬美は胸をなで下ろす。功太は、天子になったのだ。

「香は無事ですか」

「今はずいぶん落ち着いているわ」

功太は香の元により、その左手を握った。天狗からもらった腕輪を彼女の左腕にはめる。

「それは？」

「……金字などの、弱い妖怪の影響を消すためのものらしいです。すねこすりとか、禁字程度ならば、この腕輪があれば大丈夫だと」  
真つ赤になっていた香の顔は、見る見るうちに本来の白さを取り戻した。禁字の本からも、香の過去を記した文字が消える。功太はそれを確認すると、優しげな顔でほえんだ。

「よかった……」

五分もかからずに、香は目覚めた。功太を見てすぐに、「何か、あったのか」と聞いたが、功太はそれには答えず、静かに紅茶を差し出した。砂糖を三つ。香の顔が綻ぶのを見て、手に持つ蜘蛛切の意味を強く感じていた。

冬美はそれを見届けると、忍び足で図書館を出た。

玄関を開けると、冬美は大きく息をついた。彼女の、一つの大きな仕事が終わったのだ。庭を越えて、門までゆくと、追い犬が彼女を迎えた。

「主の予定り、荻原功太は天子となった」

「ええ、わかっているわ」

追い犬の声が硬いことに、冬美は気づいていた。

「もう、主の正体を隠すこともないだろう。同族殺しの天狐、香坂冬美。いや、香坂冬美という名ももういらぬか。天狐よ」

「もちろん、隠すつもりはないわ」

そう言った冬美の瞳は、普段の黒ではなかった。紅茶よりも赤く、夕日よりも透き通る紅だ。紅の瞳が笑うと、攻撃的な天狗よりも、ずっと深い狂気を感じさせた。

追い犬から見た冬美は、西洋の洋館のような、数奇な図書館を背負っていた。天狐の表情に陰が落ちているのを、追い犬が問いただすことはなく、ただ闇に消えていくのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8913w/>

---

紅茶と数奇な図書館と

2011年11月21日03時18分発行